

〈講演会記録〉  
 世界問題研究所主催  
 京都産業大学創立 50 周年記念シンポジウム  
 「沖縄問題と『複合アイデンティティ』」

東 郷 和 彦

Symposium held by the Institute for World Affairs  
 In Commemoration of the 50<sup>th</sup> Year of Foundation  
 of Kyoto Sangyo University  
 “Okinawa Problem and the Issue of ‘Multiple Identity’”

Kazuhiko TOGO

京都産業大学創立 50 周年を記念して、2015 年 7 月 25 日、廣池学園内の廣池千九郎記念講堂にて、「若泉敬先生の再発見 ― 沖縄返還交渉と日本の未来 ―」が開催された。その詳細な記録は、世界問題研究所紀要第 31 巻に上梓したとおりである。

上記「若泉シンポジウム」は、世界問題研究所草創の時より約 20 年にわたって大きな足跡を残された若泉敬先生の業績、特にその沖縄返還に対する情熱と貢献に焦点を当てて開催したものである。今回開催したシンポジウムは、若泉先生の問題意識をうけつぎ、現在の沖縄問題に直接の問題意識をぶつけたものである。

いうまでもなく、政治的視点に立てば、沖縄における現下の最大の問題は、米軍基地の有りようの問題であり、特に、1995 年の少女暴行事件以来火をふいた沖縄県民の怒りに対し、SACO 合意にて確定された普天間基地の移転問題であり、翁長知事選出以来明確化されつつある沖縄県民の「辺野古移転拒否」の世論の顕在化の問題である。

然し今回私たちは、SACO 合意以来の普天間基地移転の歴史と、その具体的解決策を求めるために今回のシンポジウムを開催したのではない。その問題は極めて重要な問題として開催者一同の脳裏にあったわけであるが、私達が最も注目したのは、この「辺野古論争」を通じて次第に浮上してきた、沖縄の人たちの「自己意識＝一般には「アイデンティティ」と呼ばれるもの」の形成の問題であった。

この問題には実に様々な側面がある。沖縄の人々が、「自分は日本人であるよりも沖縄人である」という自己意識に到達するのであれば、現状で言うなら、日本国家の中に「沖縄人」「日本人」という複合的な自己意識が生まれることになる。

しかしながら、沖縄人の人々の中に、自分は「日本人であると同時に沖縄人である」という問題意識が生まれるなら、そこには、全く新たな複合性が生まれることになる。どちらの場合にせよ、これまで「大和民族単一国家」という自己意識しかいだいてこなかった日本人の大部分にとって、ここで生じられる問題はまったく新しい問題ということになる。

この、日本人がこれまでまったく遭遇したことのない問題に、私達は白羽の矢をあててみようと思った。そして、恐らく今の日本において、この問題について、学問的にも、また自分の実体験においても、これ以上にふさわしい人はいないという、佐藤優氏に基調講演を御願ひすることとした。

言うまでもなく佐藤優氏は、2000年代の初めまでは外務省において北方領土交渉に心血をそそいでこられたが、日本側内部の政治的混乱によって刑事告訴をうけ外務省をさることになったが、その後作家として不死鳥のごとき活躍を始められた。その後の問題意識の一つとして、御母堂が沖縄の出身であることもあいまち、沖縄における「複合アイデンティティ」の問題に深くかかわってきた方である。基調演説を快くひきうけていただいた他、シンポジウム開催にあたっては、学生の参加や読書リストの示唆を始めとして、シンポジウムにおいて議論を深めるための数々の提案をいただいた。深く感謝の気持ちを表明する次第である。

更に佐藤氏の推薦をえてお招きし、快く参加していただいた遠い沖縄からの大城貞俊先生、又地元京都からの木谷佳楠先生からも、シンポジウムの議論の深化・拡大を助けていただいた。深く感謝する次第である。

本学からは、パネルにおいて国際法という切り口から積極的に議論に加わっていただいた岩本誠吾先生、全司会を務めた中谷真憲先生他多数の方の協力で、シンポジウムを開催することができた。あわせて感謝申しあげる。

願わくはシンポジウムに参加された方が、またこの記録に目を通してくださる方が、「沖縄複合アイデンティティ」という聞きなれない課題について、なにがしかの新しい印象を持っていただければと、祈念する次第である。

シンポジウム・プログラム

2015 年（平成 27 年）12 月 23 日（水）

於 京都産業大学・むすびわざ館

開会の挨拶 大城 光正（京都産業大学学長）

東郷 和彦（世界問題研究所長）

第一部 基調講演と問題提起

基調講演「沖縄問題と『複合アイデンティティ』」

佐藤 優（作家・元外務省主任分析官）

問題提起 1

大城 貞俊（小説家・元琉球大学教育学部教授）

問題提起 2

木谷 佳楠（同志社大学神学部助教）

問題提起 3

岩本 誠吾（京都産業大学法学部教授）

第二部 パネル・ディスカッション

パネラー間のディスカッション

学生とのディスカッション

会場とのディスカッション

閉会の挨拶 東郷 和彦（世界問題研究所長）

京都産業大学創立 50 周年記念事業  
シンポジウム

「沖縄問題と『複合アイデンティティ』」

平成 27 年 12 月 23 日（水）  
むすびわざ館

司会（中谷） それでは、開演いたします。

本日は、この寒い中、また遠方より京都産業大学世界問題研究所シンポジウム「沖縄問題と複合アイデンティティ」に足をお運びいただきまして、まことにありがとうございます。熱く心より御礼申し上げます。

私、世界問題研究所、そして法学部に所属しております中谷と申します。本日の進行、総合司会者を務めます。よろしくお願いいたします。（拍手）

それでは、早速ではありますが、まず最初に、本学学長、大城光正より皆様にご挨拶を申し上げます。ご登壇、よろしくお願いいたします。

## 開会の挨拶

京都産業大学学長 大 城 光 正

大城学長 皆さん、こんにちは。ただいま紹介にあずかりました京都産業大学学長の大城光正であります。

本日は、京都産業大学世界問題研究所主催のシンポジウム「沖縄問題と複合アイデンティティ」にご参集いただきまして、本当にありがとうございます。

京都産業大学は、昭和 40 年に開学し、ことし創立 50 周年を迎えました。世界問題研究所は、開学間もない昭和 41 年に本学付設の研究所として開設し、世界が直面する政治・経済の対立と調和の問題に関する学際的な共同研究を推進し、日本の国際的な貢献に資するとともに、学術の進歩・発展に寄与することを目的として活動し、今日に至っております。

本日のシンポジウムは、7月25日に麗澤大学の廣池千九郎記念講堂で、「若泉敬先生の再発見～沖縄返還交渉と日本の未来～」と題して開催いたしました今年度第1回の開催に続きまして、同じ問題意識から発する2回目のシンポジウムの開催ということになっております。第1回目のシンポジウムは若泉敬先生にさかのぼって沖縄問題を議論いたしましたが、今回は沖縄問題自体、これを最大の焦点に当てまして開催されるシンポジウムとなっております。沖縄人としてのアイデンティティと国家による安全保障の要の役割を担う日本人としてのアイデンティティとその葛藤を考えるテーマであります。

実は私の専門は、国際政治学ではなくて言語学であります。沖縄には本土の日本語と音韻的、文法的に異なる琉球方言があります。古い言語的な特徴の保持としては、ハ行音（h音）は琉球方言では古形のP音を保持しております。例えば「花[hana]」は、琉球方言では[pana]となります。また「船[hune]」は[puni]となって、同様にP音が保持されています。こういう古い特徴が沖縄の方言には残っています。

この古いP音については、以前に使い捨てカイロの「金鳥どんと」のCMに、桂文珍と西川のりおが縄文人に扮して、「ちゃっぴいちゃっぴい、どんと ぼっちい」と言う場面がありました。恐らくもう30年くらい前になりますから皆さんは覚えておられないかもしれませんが、「ちゃっぴいちゃっぴい、どんと ぼっちい」の「ぼっちい」は「ほしい」の「ほ[ho]」を「ぼ[po]」でもって、つまり古代の日本語の音形でもってCMされたものであります。この一文は「寒い寒い、どんとがほしい。」という意味なのです。

また琉球方言の言語的な改新では、日本語の5つの母音[a,i,u,e,o]の中のエ[e]がイ[i]に、オ[o]がウ[u]に変化して3母音体系[a,i,u]になっています。例えば、「船[hune]」が[puni]、「雲[kumo]」が[kumu]になります。このように本来の原初的なP音を保持する古形と3母音体系への改新形の両面的な様相が琉球方言には顕著な形で残っているのです。

私の専門はすでに申しましたように言語学ですが、その中でも特に、同系性が推定される諸言語を比較することで、同系性や親縁性を明らかにする比較言語学の研究に勤しんでおります。比較言語学的には、本土の日本語と琉球方言の間には、すでに挙げましたような、母音の[e]と[o]が琉球方言の母音の[i]と[u]に対応するという明白な対応関係が存在していますので、琉球方言は明らかに日本語の一方言ということになりますが、一方で琉球方言を独立した単独の言語の「琉球語」として分類しようという説もあります。つまり、「琉球方言」か、または「琉球語」か。これについては、比較言語学的に「言語」と「方言」を類別する客観的な基準が存在しないために、「言語」と「方言」の類別は歴史・民族論、または国家・政治論といった、主観的かつ繊細な問題に関わることがあります。歴史的には琉球王国という一国家における national language（国家語）として「琉球語」が確立していました。西洋の学者が沖縄をフィールドワークしたときに、これは「日本語」で

はなくて「琉球語」という形で明記したのもそういうことであります。すなわち、沖縄の言葉は、日本語の一方言なのか、または琉球王国という国家語であった史実をもとに「琉球語」としてみなすのか。これも本日のシンポジウムの中で歴史・民族論または国家・政治論という形で深く関わっているということが言えます。

私自身は、そういう意味で国際政治学の専門ではありませんが、言語学の観点からも沖縄の置かれている立場というものは考えざるを得ないところがあります。つまり、沖縄の地理的な問題、安全保障の問題などと同様に、言語学的に見ても沖縄の言葉には歴史的に民族論または国家論的な複合的な言語的要素が混在しているとも言えるのです。

ただ、本日のテーマは言語学的なテーマではありませんので、国際関係、国内政治、または人権問題など、沖縄の置かれている問題を含めて、複合的なアイデンティティの問題として徹底的に議論してほしいと思っております。

実は私の姓が「大城」ということから、「学長は沖縄出身ですか。」と聞かれることがあります。私は“一応”広島生まれ広島育ちであります。私の答えに“一応”を付けましたのは、私のルーツを辿っていきますと、ひょっとしたら沖縄に行き着くかもしれません。そういうことで今回のテーマと同様に、今一度私自身のルーツを考えてみるきっかけにもなればと、そのように思っております。

結びに、本日は最後までご参加願いまして、皆様方にとりまして実りあるシンポジウムとなりますことを祈念して、開会の挨拶とさせていただきます。

本日のご参加、本当にありがとうございます。(拍手)

## 開会の挨拶

世界問題研究所長 東 郷 和 彦

司会 それでは、続きまして当研究所所長、東郷和彦よりご挨拶を申し上げます。ご登壇ください。

東郷所長 皆さん、こんにちは。ご紹介にあずかりました東郷和彦でございます。

きょうは、休日にもかかわらずこの会合に来ていただいて、本当にありがとうございました。ここへ上がってみますと、ちょっとライトがまぶしくて皆さん全員のお顔が必ずしもよく見えないのですが、既によく存じ上げている方がたくさんおられます。それから、もちろんきょう初めてお目にかかる方もたくさんおられます。きょう世界問題研究所長としまして、この沖縄の問題、複合アイデンティティの問題についてのシンポジウムを開催することができて、本当に感無量でございます。

きょうの最初のご挨拶で、私は皆様にぜひ3人の人間についてお話し申し上げたいと思ってやってまいりました。

### ＜若泉敬と沖縄＞

最初の人間は、申し上げるまでもなく、今、大城学長のほうからもご紹介のあった若泉敬という先生でございます。若泉敬先生は、私が外務省で仕事をしていた間、当時の日本をリードする国際政治の学者でおられました。私は1回もお目にかかったことはありません。けれども、私の同僚で条約局で長く一緒に仕事をした、今、安全保障会議の事務局長をやっております谷内正太郎氏が深く敬事していたということで、谷内氏と条約局で一緒に勤務したときに、何回か若泉先生の話は聞いたことがあります。当時の日本の学界からしますと、若泉先生は非常なリアリストで、今、若泉先生の書いておられるものを読みますと、すごく腑に落ちる点がたくさんあります。ただ、1960年代から70年代、高度成長期が終わって日本がこれからいよいよ国際政治の中にもう一回出ていこうというときに、リアリズムをベースにして出ていこうというだけではなくて、若泉先生はそのリアリズムを実現する新しい自立する日本をつくっていくための本当のかぎの問題が沖縄問題だと思われたのだと思います。その結果、1969年、皆様ご案内の佐藤・ニクソン共同声明、これは沖縄の核兵器の問題を処理した共同声明ですけれども、その共同声明についての裏の交渉を担当されました。若泉先生の決意として、どうしてもこの時期に沖縄の施政権を日本に戻したかった。そのために沖縄にある核兵器は一回外す。一回外すけれども、ベトナム戦争が起きている最中ですから、極東が有事の場合にどうしてもアメリカがもう一回沖縄に核兵器を入れたいと言ってきたときには、無条件に入れるという大変な約束をされたわけであります。そういう約束をしてまでも、どうしても沖縄を日本政府の施政権のもとに戻したかったというのが若泉先生の信念だったと思うのです。戻ってきた沖縄が、それでは若泉先生が期待していたような幸せな沖縄になったか。なっていないのではないかということから若泉先生の非常な煩悶が始まり、最後には『他策ナカリシヲ信ゼムト欲ス』という本を書かれて、その後、いわば自裁する形で世を去られたということであります。69年の交渉のときに、なぜ若泉先生が一回外した核兵器をもう一度持ち込むという約束をしてしてまで沖縄を取り戻そうとしたのか。これが私、外務省でいた間も、それからここの研究所に来てからも、ずっと考えていた問題であります。

### ＜東郷文彦と沖縄＞

2人目の人は、その若泉先生の69年の交渉をしたときに、いわば外務省の表の交渉をしていた当



時の北米局長、私の父の東郷文彦の問題であります。東郷文彦も若泉先生とある意味で同じように、この時期にどうしても沖縄を日本の施政権のもとに取り戻さなくてはいけないと思った1人です。それは彼が外務省の中で書きたいろんなものを見ますとはっきりしているんですけども、若泉先生が69年の秋の交渉でアメリカから秘密合意議事録をのめと言われたときに直面した問題と同じ問題に約半年前に直面しました。それは、沖縄が返還されるとき日本の基本ポジションをどうするかということで、当時の佐藤内閣の内部で非常な議論になったときであります。そのときに沖縄に核兵器がある。その沖縄の核兵器を撤廃できて戻ってくれば、もちろんこれに勝るいい条件はない。しかし、アメリカがどうしても核兵器があるのを手放さないとやったときにどうするかという問題が出ました。そのとき東郷文彦は、省内の議論で、日本人としてもう一度考えてほしい。アメリカが核兵器を放さない、そしたら核兵器がついているような沖縄なら日本に返ってこないほうがいいのか、それとも万やむを得ざる、核兵器つきでも沖縄を取り戻したほうがいいのか、そここのころの腹が決まらない限り交渉における力が出ないという議論をしたのです。そのときの東郷文彦の結論は、疑義の余地なく、核兵器つきであっても、それでも日本の手に一回取り戻そうという議論をしていました。しかし、69年の春に、これは佐藤総理の大号令が下りまして、「核抜き本土並み」ということになって、それ以降の交渉が進んでいったわけであります。しかし、「核が付いていても返してもらった方が良い」ということを、82年に父が外務省を辞めた後に書いた『日米外交30年』の中で非常にはっきり書いております。

東郷文彦がどうしても核兵器つきででも、どうしてもその時点で沖縄を取り戻したいと思ったのか、これが私にとってなかなかわからない問題でありました。若泉は、一回外した核兵器をもう一度戻せとアメリカが言ったときに、ほかに策がなければ戻すという約束をしてでも沖縄を取り戻したい。東郷は、今ある核兵器をそのまま置いたままでもいいから沖縄を一回日本の手に戻したい。この2人が1969年、今から40年前、日本が経済成長に成功して、これから世界の経済大国として、それから政治国家として出ていこうというそのときに、どうしてこの2人がこれほどまでに沖縄の返還ということを主張したのか。これが私にとってはわからない一つの謎でありました。

### ＜佐藤優氏と沖縄＞

それから時代が変わりまして、この世界問題研究所に迎えていただきまして、若泉敬、東郷文彦の問題を私なりにもう一度勉強し始めたときに、私はきょうご紹介したい3番目の佐藤優氏から沖縄の話聞くようになってきたわけであります。私と佐藤氏との関係は、もう皆様ご存じかと思えますけれども、外務省でロシア問題を一緒にやってまいりました。最後の特に10年以上、私がソ連課長から条約局長、欧亜局長ということで本省における判断をするポジションにいたときに、佐藤氏は最初



はモスクワ、その後は本省に帰ってきて、私がある時にやれた対口政策、その全ての点において、情報分析だけではなくて、これから日本がどういう手を打つかということに関して数限りないアドバイスをいただきました。いろんなことがあって、2001年から2002年の交渉の後、2人とも外務省を辞めまして、その後佐藤氏も私も活動の範囲が広がったというか、変わっていったと思います。私はそれまで全くやったことのなかったアジア問題に関心の中心が移ってまいりました。佐藤氏は皆さんご存じのように、今、日本で最も多作、しかも書いている範囲が哲学から、日本思想から、外務省の内輪の話から、あらゆる問題についての多作の作家になっています。

ところが、2006年に私が外国から帰ってくるようになって佐藤氏と話をしているうちに、沖縄の話がしばしば出てくるようになりました。私、最初はちょっとよくわかりませんでした。ところが、話をしているうちに、佐藤氏の沖縄に対する関心というのは半端なものではないなということを感じました。爾来注意をして佐藤氏の沖縄の話聞いてまいりまして、きょう皆さんに申し上げたいのですけれども、40年前、若泉敬と東郷文彦が持っていたある種の沖縄に対する日本人としての思い、これを40年たって全く違った形で、今、私たちに話してくれるのは、これは佐藤氏ではないかなと思うようになったのです。それはもちろん40年の間の日本の変化、40年の間の日本と沖縄の変化、これを踏まえた上での新しい発見でありまして、ただ、40年前の東郷・若泉の持っていた思いというものを一番よく理解し、それを今の沖縄の問題に照らして解説してくれる人は佐藤氏ではないかなと思っていただけであります。きょうはからずもこのシンポジウムで佐藤氏を基調講演に迎えて話を伺えるというのは、本当に私はうれしい、本当に楽しみです。きょう3人のパネラーと一緒に、佐藤氏が今、沖縄について私たちが何を持つべきと考えているかを聞いて、これから半日間、皆様と一緒にそこで学んでいくことができたなら心から思っております。

きょうここでたくさんの方、私の友人、新しい方と一緒に話を伺うわけですが、しかし、もはや幽明界を分けましたけれども、私は必ず若泉敬先生、それから父、東郷文彦が天にあっては、きょうのこの私たちの議論を聞いていてくれるのではないかなと思います。そして地においては、佐藤優氏という私の最も尊敬する友人であり、多分今の時点で沖縄の問題を最も深く語れる立派な人を基調講演に迎えて議論することができます。本当に願わくは、きょう来られた方みんながあと4時間たったところで、何がしかでもこの問題についての新しい理解をもってこの部屋を去っていただければ本当にうれしいなと思っております。きょうは皆様お越しいただいて、本当にありがとうございました。(拍手)

## 第一部 基調講演と問題提起

司会 大城学長、それから東郷所長、ご挨拶ありがとうございました。

それでは続きまして、きょうの登壇者の方々を、一番最初にまず順にご紹介いたします。

最初に、佐藤優先生、登壇ください。(拍手) もちろん皆様よくご存じですが、作家でいらっしゃるって、元外務省主任分析官でいらっしゃいます。

続きまして、大城貞俊先生、ご登壇ください。(拍手) 大城先生は、小説家、そして元琉球大学教育学部の教授でいらっしゃいます。

続きまして、木谷佳楠先生、ご登壇ください。(拍手) 木谷先生は、同志社大学神学部の助教を現在、務めておられます。

それから最後に、本学世界問題研究所所員でもあります岩本誠吾先生です。ご登壇ください。(拍手)

このメンバーで、本日は基調講演から始まり、そして各先生方のご報告、そしてパネルディスカッションと進んでまいります。どうぞよろしくお願いいたします。

それぞれの先生方の詳しいプロフィールは、また後ほどお一人お一人のご報告のときにご紹介をいたしますけれども、今は簡単ご紹介にとどめまして、佐藤先生がお残りいただいて、そのほかの方は一旦ご降壇ください。

それでは、これから 40 分間の予定でありますけれども、つまり 13 時 55 分から 14 時 35 分までとなりますが、佐藤優先生から基調報告をいただくことになっております。

改めてプロフィールをご紹介申し上げます。佐藤先生は、1960 年にお生まれになりました。作家、思想家、幅広く活躍をされていることは皆様よくよくご存じのことと思います。85 年に同志社大学神学部を卒業されまして、同年に専門職として外務省に入省されました。そしてモスクワ日本大使館に赴任され、この時期のことですのでゴルバチョフの登場からソ連邦の崩壊に至るまで、その全ての経緯をつぶさに経験されてこられました。95 年より外務省国際情報局にて勤務されまして、98 年に分析第 1 課主任分析官に就任されておられます。その後、『国家の罫』、これは 2005 年ですけれども、これが大ベストセラーになりまして、恐らくお読みになった方々も多かろうと思いますけれども、そのほかにも『自壊する帝国』、これは大仏次郎賞を受けておられます。ルーツということで申し上げますと、お母様が沖縄出身でいらっしゃるということでして、沖縄問題に関して特に近年、非常に深い発言をさまざまな場でされておられます。著書はもう多数というか、無数に書かれておられますので、一つ一つお読みすることはできないわけですが、それでは、佐藤先生、どうぞ基調講演のほうをよろしくお願いいたします。

## 基調講演

## 「沖縄問題と『複合アイデンティティ』」

佐 藤 優

## Okinawa Problem and the Issue of ‘Multiple Identity’

Masaru SATO

## &lt;はじめに言葉ありき ― 言語と方言&gt;

ただいまご紹介にあずかりました佐藤優です。「ハイサイグスーヨ、チューウガナミビラ、サトウマサルヤイベーン」、今、琉球語で「こんにちは皆さん、ご機嫌いかがですか。佐藤優です」と言っただけです。先に、大城学長のほうから、さて、言語学の世界においては方言か言語かというのは非常に難しい問題なんだということがあったわけです。挨拶一つにしても、恐らく沖縄の出身の人以外の間ではコミュニケーションがとれないと思うのです。例えば「ウチナンチュー」の気持ちを理解しましょう。最近、講談社から出ている沖縄現代文学選の中の解説に、日本人がそういったことを書いているのですが、細かい揚げ足をとるようではありますが、「ウチナンチュー」の気持ちを理解するとカタカナで書いている時点で、まずアウトですね。これは「ウチナンチュー」ではないのです。「ウチナンチュ」なんです。琉球語においては音引きが非常に重要になるんですね。沖縄のワのところはウチナーになるんです。ウチナンチューとなると、若干侮蔑のニュアンスが入るんです。だから、ヤマトンチューと長く延ばしているのは、くそ日本人ぐらいの感じだと思うんですね。そうすると、沖縄人がくそ沖縄人と自称することはないのです。そうすると、ウチナンチューの気持ちがわかるという、この「チュー」としてしていると、それだけでどの程度の認識なのかということが知れちゃうわけです。19世紀のロシアの思想家でピーサレフという人がいました。この人が「半教養は無教養より悪い」ということを言っているのですが、沖縄関係のところではときどきそういう話を散見するわけです。

さて、モスクワにいたときのことで。ロシアに民族学人類科学アカデミーの研究所があります。そこに、東郷さんもよく知っているのですが、セルゲイ・アルチャーノフ博士という科学アカデミーの歩く百科事典と言われる人がいます。日本語、英語、ドイツ語、ロシア語、グルジア語、

アルメニア語、フランス語、これで論文を書くし、講演ができるんです。理解している言語だったら40の言語を読むことができる、こういう先生なんですね。アイヌ関係の本を2冊書いていまして、バチュラー訳のアイヌ語聖書をすらすら読んで、訳して教えてくれるんです。この先生から私はあるとき言われたんです。あなたは日本の少数民族系じゃないか。私は、「母のルーツが沖縄ですけど」と答えました。するとアルチューノフ先生から「それでわかった。ほかの大使館の人たち、日本人の学者たちとちょっと違うんだよね。要するにバルト諸国であるとか、アゼルバイジャン、アルメニア、チェチェンなんかの話をしているときに、あなたは少数民族の感覚がよくわかる。というのは、こういうのをわかるのは通常少数派なんだ」という話がありました。アルチューノフさんはトビリシで生まれた（トビリシというのはグルジアの首都です）アルメニア系のロシア人で、ルーツの中にはユダヤ人のルーツもある。そういう複雑なところがいろいろわかって、そこから日本に関心を持った。だからアイヌ語なんかも詳しいわけですよ。

そこのところで、ふと私はこういうふうに聞いたわけです。「日本語と沖縄の方言というのは言語なんですかね。それとも方言なんですかね」と聞いたら、アルチューノフ先生は笑いながら、「独自の軍隊を持っていると言語、そうでない場合は方言、こういうふうに考えたほうがいい。言語か方言かというのは政治的概念だよ」こういうふうにこの先生に言われたことが非常に印象に残っています。そのときは笑い話半分で、ベラルーシ語とロシア語は言語か方言かというようなことで外務省の公電で送ったことがあるんですが、自分がこの問題に直面するとは全然思っていませんでしたね。

### ＜扱いにくい沖縄問題 ― 何が原因で何が結果か＞

沖縄問題は扱いにくい。大体圧倒的大多数の日本人からすると、話を聞いていて不快なわけなんです。自分が何か直接悪いことをしているわけでもないのに、何で責められるような話なのか。そういう話は聞いていても不愉快です。それから、中国の脅威がある中で、国防はやっぱり負担してもらわないといけないし、沖縄は近いから、それは地政学的にやむを得ないじゃないか。それは甘受してくれ。悪いが、あの戦争だって広島にだって原子爆弾が落ちたし、長崎にだって原子爆弾が落ちたし、東京大空襲で10万人以上死んでいるんだし、地上戦があったと言ったって、地上戦の形態はとらななくても、日本全体が苦勞したんだ。「沖縄だけが云々…」という感情は、口に出すか出さないかは別として、圧倒的大多数の日本人が持っていると思うんですよ。

これはロシア人がバルト諸国の人たちの気持ちがわからなかったのとちょっと似ています。バルト3国においては非常に独裁的なナチスに近い政権があったじゃないか。それを我々が解放したんだ、こういうふう思う。あるいはラトビアでは人口の51%がロシア系になってしまった。ラトビア人は49%になった。そういう状況の中で、ラトビア語を公用語化する、ラトビア語というものを行政

で使える言語にしようと言ったら、何でそんな小さな言語に固執して、何のいいこともないじゃないか。別にそういうような形で言語を公式の場で使うと強要しなくても、家で使っている分には自由に使えるから、ロシア語を普通に使ったほうが、これは他の国内を移動して移住してきた人にとっても平等じゃないか、こういうような議論が出てくる。こういうようなところに込められている少数派の感情や独自の皮膚感覚というのはわからないわけです。

沖縄問題と言うけど、この前ゴルフに沖縄に行ってきたんです。キャディさんに基地問題についてどう思うか聞いたんだけど、しょうがないじゃない。やっぱりそれは経済で潤っている人もいるからと。あるいは民謡酒場に行って酒場の人に聞いてみた。どう思う、最近いろんな形で、沖縄県知事というのはものすごい強硬な姿勢でいるんだけど、一部で独立なんていう話も新聞の報道では見るんだけど。そんなこと誰も考えてないよ。政治家はいろいろあるんだけど、これはしょうがないよねというぐらいの話を聞くと思うんです。これを聞いてそれを額面どおりに受けとめているというところが多数派の特徴なんです。

朝鮮半島を日本が植民地支配している時代に、朝鮮半島、これは金達寿さんの『玄界灘』なんかを読むとその辺の雰囲気非常によくわかると思うけれども、現地に行って日本の日韓併合をどう思うかと言ったら、日本人が尋ねると、圧倒的大多数の韓国人、朝鮮人は、いや、これはそれによって近代化が進んだからよかった。「内鮮一体」ですねと答えたと思う。あるいはこの前、原節子さんが亡くなったでしょう。その機会に皆さんぜひ「新しい土」というナチスのゲッペルスが鳴りもの入りでつくった日独合作映画を見てみる。あそこの中において描かれている満州国というのは、まさに新しい土で、王道楽土というイメージだったんだけど、当時日本から行った出張者が満州国に行って地元の中国人に満州国の現状はどうかと聞いた場合には、これは肯定的な返事しか返ってこなかったと思います。

沖縄と日本の最大の問題は、僕は人口差だと思うんです。99対1、1%しかいない人たちというのは圧倒的に強い人から何か聞かれたときに、自分の本音をなかなか語ることができない、こういう問題があるわけですね。それから言葉に関しても、私が一生懸命琉球語の勉強を始めたのは6年ぐらい前からです。ただ、先生が3年前に亡くなっちゃったので中断しているんだけど、失われた自分の言語だという意識はすごく強い。ところが、この失われた自分の言語だという意識はどこから出てくるかというと、私は同志社大学の大学院でチェコの神学を研究したんです。19世紀前半にチェコ語なんてみんなしゃべらなくなったんです。みんなドイツ語をしゃべるようになった。ところが、ユングマンとかドブロフスキーとか、そういった言語学者たちが、自分たちはドイツ語しかしゃべれない。しかし、自分たちの言語であるチェコ語を復活したいといってフォークロアを集めてくる。チェコ語を使えない連中が辞書を編さんするんです。それで、次世代に託して、2世代でチェコ語というのは完璧に近代語として成立して、複雑ないろんなことを表現できるようになるわけです。これはハ

ブライ語でもそうです。ですから、あのこと言語というのを回復していこうとしたと人たちの気持ちというのは、皮膚感覚でわかるわけなんです。

沖縄では、今回、作家の大城貞俊先生が来られておりますけれども、沖縄で芥川賞を受賞した人はたくさんいます。要するに純文学、高文化の文学ですよ。これは沖縄においても非常に発展していますし、知識人たちが読む言語形態において知識人たちの世界を中心に訴えるような文学というのは、これは日本本土と比べても全く遜色がない。ところが、大衆文学ということになった場合に、直木賞を受賞した作家が今まで1人もいないんですよ。これはどういうことか。エンターテインメント文学になるところにおいて、自分たちに内在している言語をうまく表現することができないんですね。ですから逆に芸能の世界であるとか、そういったところで表現できる。あるいは我々は五七五七七と基本的に和歌のリズムで、これは私たちの中に流れている。逆に五七五七七を七五に変えると、「酒は飲め 飲め飲むならば日の本一のこの槍を」、こういう方向にすると新体になるわけです。七五七五にした瞬間になって勇ましく感じるわけです。我々の血というのは騒ぐので、このリズムは我々はわかるんです。沖縄はリズムが違うの。サンパチロクと言われているんだけど、八八八六で歌を詠むわけ。だから、持っているリズムも違うんです。

現在の今上天皇陛下は、琉歌をたくさん詠まれています。実はこの琉歌を詠まれているということは、日本の国家統合において私は非常に大きな機能を果たしている。どこまで意図的かどうかということはまた別ですけども、こういうふうに思うんです。いろんなリズムの違いとか何とかいろいろあるわけです。そうすると、私は沖縄のことについて理解する場合に、ちょっと今、政治の言語が過剰過ぎる。一旦政治を脇に置かないと、この問題はわからないのじゃないかと思っているわけです。

そこで、きょう木谷佳楠先生が来られていますけれども、木谷先生も大変に著名な神学者です。そしてジェンダー論とか、あと表象文化論、映画を分析していく手法において神学的に語ることができる日本の第一人者です。我々神学の世界の人間というのは、ほかの学問とちょっと違う手法を使うわけです。それは類比なんです。論証ではなくて類比なんです。類比アナロジーの方法というのを使うと、通常のアカデミズムの論文においては議論が飛躍していると、はねられちゃうんです。ところが、この類比の力というのは近代的な合理主義の枠を超える力があるわけです。

例えば今、「イスラム国」の問題があるでしょう。これは何でマスメディアの報道や有識者の解説を聞いても、ほとんどのところその意味がよくわからないか。これは原因と結果を混同しているからなんです。こういうときに類比をまず使いましょう。私の顔にいろんなできものができました。市販の軟膏をつけてとりあえず引っ込んだ。ところが、またしばらくたって出てきたんです。今度は皮膚科に行きました。そしたらかなり強いステロイドの軟膏を処方してもらった。そしたら引っ込んだ。しかし、また出てきた。もっと強いステロイドを処方したんだけど、余りきかない。そこで人間ドックに入って徹底的な精密検査をしてみたら、大分肝臓が弱っていることが判明した。ちなみにこれは



私の話ではなくて、私は肝臓は丈夫です。腎臓は若干問題がありますけれども。そうすると、この顔にできたできものに強い軟膏を塗るという対症療法というのは、これで問題が解決すると思っているというのは原因と結果を取り違えているわけですね。「イスラム国」は結果なんです。

じゃ原因は何か。イスラムの専門家でもこのところまでは分析で出きている。1916年、第一次世界大戦中につくられたサイクス・ピコ秘密協定、これによって宗教・資源・地理・歴史的経緯、これらを一切無視した国境線が引かれたから、それによって上から国家がつくられたんだけど、その国家というものは独裁政や王政によってとりあえず維持されていたけれども、機能不全を起こしている。その機能不全というのが、アラブの春の失敗によって不可逆的なところに至った。こういう説明ですよ。ただ、これではまだ中途半端だ。なぜならば、サイクス・ピコ協定をベースとしたところでできている国境線ならば、現在のトルコの国境線だってそうです。あるいはイスラエルもそうです。なぜイスラエルにおいて、あるいはトルコにおいてはこのような混乱が生じないのか。これに関してはもう少し踏み込んだ神学的な考察が必要だと思うんです。

皆さん、ここで質問です。人権の反対語って何でしょうか。人権の反対というと、人権を蹂躪しているから独裁か。これは違いますね。人権の反対語は神権です。神様の権利です。日本の保守派の政治家がときどき天賦人権説は日本の国柄もしくは国体に合致しないというような発言をしますね。これは正しいんです。なぜならば、神権というものがあって、神様が天地をつくって、神様が全権を持っていて、神様が統治しているというシステムのところで、これは中東も、ヨーロッパも、ロシアもこのシステムが支配してたんです。ところが、ガリレオ・ガリレイやコペルニクスが出てきてしまった。そのために上にいる神といったって、上ってどこなんですか。地球は球体であるということを前提にすると、ブラジルから見て下は地球の真ん中を突き抜けて日本に出てきたら、上ですよ。上とか下とか言っても意味がない。また、地球は世界の中心じゃなくて、太陽系の中の1つの星であり、その太陽系という銀河が宇宙の中の中心であるという発想自体も否定されるとなると、神様というのはどこにいるのかというこの問題が非常に深刻になるわけです。

そこで、プロテスタント神学は神様は心の中にいるという形で処理して、心は目には見えないんだけど、確実にあるでしょうと、こういうふうに変換するわけです。そして神様が持っていたところの主権、統治する能力、支配する能力、法を定める力、これは人間が持っているということになったわけです。フォイエールバッハの神が人間をつくったんじゃなくて、人間が神をつくったんだというのは正しいんです。そこから人権が出てくるわけですね。この人権の思想というのは、ヨーロッパが資本主義化に成功して帝国主義化してから世界の普遍的な原理のごとくなって伝わってきたので、日本でも、トルコでも、イランでも適用されているわけですよ。だから、イランでも、トルコでも選挙によってみずからの代表というものが選ばれるわけですね。民主主義が一応の原理になっている。

ところが、アラブ世界においては神権のままなんです。人権の思想や転換がなされなかった。外



国から留学してきたごく一部の人たちが国際基準の人権思想というものをアラブ諸国に導入しようとした。欧米はそれをサポートした。その結果、自由選挙が行われた。でも、そのきっかけになったのは、チュニジアのベンアリ政権が2011年におかしくなったのも、1人の行商人の青年が横暴な警官の対応に抗議して焼身自殺したからでしょう。それが引き金になって構造が変わってきた。それで民主的な選挙をしたら、その結果、神権を考えている人が圧倒的大多数ですから、民主主義を否定する神権論者が民主的な選挙を通じて権力を掌握することになったということで混乱が生じているわけです。ですから、イスラム国というのはその一例ですよ。こういう近代システムと合致できない領域のところからアルカイダが出てきて、アルカイダを除去したらイスラム国が出てきた。イスラム国を除去したら、また似たようなものが別の形で出てきますよ。根本的にアラブ地域において新しい秩序が生まれるまでは、この問題は解決しない。原因と結果を混同しないということはこういうことなんです。

そうすると、沖縄に関しても原因と結果を混同しないことが非常に重要になってくるわけです。辺野古は結果なんです。原因はどこにあるか、これを我々は考えていかないといけないんですね。

### ＜与件の変化によって「民族」になる ― 沖縄と言う場所＞

そこで理解しておかないといけないのは、民族という流行についてなんです。民族に関しては、学術的に言うと2つの考え方に大きく分かれます。1つは、原初主義です。プリモジャリズムです。現象主義って何かというと、民族というのは極端な形で言うと血筋。ただ、民族の定義に血筋を入れているのは、今のところ北朝鮮だけ。それ以外のところは民族の定義に血筋は入れていない。地理であるとか、地理的共通性であるとか、共通の経済単位であるとか、言語、こういうような実体的なものがあって民族ができてくるのだ。マスメディアで使う場合、我々が日常的に意識している民族の感覚です。日本は皇紀2600年のお祝いがあったから、2,600数十年日本の歴史があるのが神話だとしても、少なくとも五、六世紀には日本はあっただろう。日本人もいただろう。我が民族はいただろうというのが常識的な理解ですよ。ロシアだったら、988年がキエフルーシのキリスト教導入だから、1,000年ぐらいは歴史があるんじゃないかな。こういう民族が古くからあるという考え方は、学問的にはほぼ完全に否定されています。現在、アカデミズムで主流となっている考え方は道具主義です。要するに道具主義というのは、乱暴な言い方をすると、民族は、エリートが自分たちの温かい地位を得るために民族という道具を使っている。こういうようなもので、たかだかフランス革命以降の流行にすぎないから、250年程度の歴史しか持たない。それより前においては、民族は人間が動く基準にはならなかった。これはほぼ実証されています。最近亡くなったベネディクト・アンダーソンさん、『想像の共同体』の著者ですね。あるいはアーネスト・ゲルナー、イギリスの社会学者です。前者はアメリ

カの政治学者です。こういう人たちの考え方ですね。ロシアでしたら、バレーリー・チシュコフさんなんかがそういった考え方をしています。

いずれにせよここで重要なのは、民族というのは比較的新しい概念で、それは変容しやすいということなんです。ロシアには例えばコサック民族というのがいる。きのうまではロシア人もしくはウクライナ人だったのだけれども、髭を生やして、剣を持って、自分たちはコサック人だと思いたしたらコサック人になっちゃったわけです。あるいはウクライナの東部地域を見てみましょう。この地域の人たちはロシア語をしゃべっているんですよ。宗教は正教。ところが、パスポートはウクライナのパスポートを持っている。自分たちはロシア人かウクライナ人かと考えたことがないんです。ただ、今回みたいな紛争が起きると、どっちか選ばないといけないんです。どっちか選ぶことによって、これは家族でも親族でも分かれて殺し合いになる。こういうことが今の瞬間に起きているわけです。でも、それはそういうふうに別れ得る可能性があるような理由があった。この理由に関してどう見るかということで、例えばイギリスのアンソニー・スミスやエトニという概念で説明しているし、ロシアの民族学者たちはエトノスという概念を使っているんです。

細かい学術的な議論というのはここでは端折りまして、かぎとなる概念をロシア語で「ナロードノスチ」という概念があるんです。日本語では亜民族と訳しています。独自の言語、文化、自己意識と、それから自分たちの集団を指し示す名称を持っている集団で、近代においては大きな民族の一部の中に入っているんですけども、完全に同化しているわけではない。かといって完全に独立の民族になっているわけじゃない。こういうのを亜民族とロシア語で言うのですが。与件が変化することによって民族になる可能性がある非常に面倒な場所なんです。

その面倒な場所というのが沖縄なんですね。この沖縄人、琉球人、ウチナーンチュ、沖縄県民、沖縄の人、いろんな表現がある。それはそれぞれの人の立ち位置によって違ってくるんだけど、日本人であるという自己意識と沖縄人であるという自己意識を濃淡の差はあれ持っていて、それは変容してくるわけです。

複合アイデンティティはいろんな面であるんですよ。私は男性という複合アイデンティティもあります。あるいは神学を勉強したから神学部出身というアイデンティティも私の中では大きい。あるいは日本基督教団というキリスト教の教会に所属していますから、その教会に所属している、私の通っている教会は会衆派という派の流れを組んでいます。そうすると、木谷さんと私は同じ教会のメンバーですから、木谷さんとは同一の共同体に帰属しているという意識もあるわけです。いろんな意識がいろんなところにある。あるいは私は飛行機の模型を集めるのが非常に好きですから、今はドイツの航空機模型会社の500分の1のシリーズで、旧ソ連製のイリュージンとツポレフのモデルがあると、eBayで一生懸命端から買っている。そうすると、こういうようなオタク的な趣味を持っている人たちの間では共通のすなわち、500分の1のスケールで旧ソ連の飛行機を集めるというアイデンティティ、

帰属意識があるわけです。あるいはアマチュア無線もやっていましたから、もう一回アマチュア無線の少し上の級の免許を取って再開しようと思っているから、無線屋さん（ハム）としての帰属意識もある。そのうちのどの帰属意識がどういうふうにして出てくるかということは、これは文脈によるわけです。

ただ1つ言えることは、沖縄と日本とか、民族というのは近代人にとっての一番重要な宗教なんです。アーネスト・ゲルナーはこういった言い方をしている。人には目が2つあって、耳が2つあって、鼻が1つあって、口が1つあるというのが当たり前に思うように、いずれかの民族に所属していることが当然とされている。そうすると、身体の欠損があるように、民族に所属しない無国籍の人間、こういう者がいるんだけれども、これは正常でない現象として受けとめられている。しかし、それは間違い？ 民族というのは歴史的には200数十年しかさかのぼれないし、自然的な属性ではないと言っているわけです。複合アイデンティティを持っている人、今になって外務省の中で振り返ってみると、外務省で国益ということに関してかなり一生懸命になる傾向の人というのは、在日韓国人で、実はお母さんが在日韓国人で、日本国籍を取得して、外交官になった、こういう人。それからあと東郷さん自身が開示しているからこれも語ってもいいと思うんですけども、東郷さんは東郷茂徳外務大臣の自伝を読めばわかるように、もともとは豊臣秀吉の朝鮮出兵のときに連れ帰ってきた陶工たちの1人ですよね。沈壽官さんたちのグループの。この人たちというのは、韓国人である、朝鮮人であるというアイデンティティというのは日本の中に入っても長く持ち続けている。ですから、東郷さんは先ほどの話の中でアジアに対して関心が出てきたというのは、私の第三者的な分析だと、彼自身のルーツというものの確認ということと非常に関係していると私は見えています。

でも、それだけじゃなくて、こんな不思議な話があるんです。私のイスラエルの友人たちは、東郷さんどうなっているか、東郷さんどうなっているかということで、東郷さんがあの鈴木宗男騒動に巻き込まれて国外に出ざるを得なくなったときに、しょっちゅう聞くんですよ。どうしたか。同胞だからと言うんです。彼はユダヤ人だからだ。こういうことなんです。ユダヤ人の世界というのは母系なんです。東郷茂徳外相の奥さんはエディ東郷さんで、この人がユダヤ系であったということはいろんな書物に出ているわけです。東郷茂徳さんとエディさんの間には東郷いせさんというお嬢様が1人おられた。それは東郷さんのお母さんなんですよ。ユダヤ教は母親がユダヤ人であると自動的にユダヤ人なんです。本人がどういう意識を持っていようが。となると、東郷さんのルーツということを考えると、イスラエルのシオニストたちにとっては他人事と思えないわけなんですよ。東郷さんは、外国におられる間、オランダのライデンであるとか、プリンストンであるとか、いずれもインテリの中でユダヤ系のインテリが非常に強いところにいました。そこの中におられたということは、深読みのしすぎかもしれないけれども、偶然じゃないかもしれない。

東郷さんが北方領土問題を解決するときに、東郷ソ連課長のときか、東郷在ロシア特命全権公使の

ときか、東郷条約局長のときか、東郷欧亜局長のときしか動いてないんです。ラインの中で東郷さんがいるときしか動かなかった。何かほかの役人と違うところがあったわけですね。それだから、早期退職を余儀なくされるような要素もあったと思うんですけども、また私が東郷さんに強く共鳴したのは、東郷さんにとって日本人って存在概念じゃないんですね。ビーイング (being) じゃないです。ザイン (Sein) じゃないです。日本人になっていく生成概念なんです。ビーカミング (becoming) なんです。ヴェルデン (Werden) なんです。どうやって日本人になっていくか。この生成概念ということを沖縄の人々というのは例外なく抱えている。どのような形で日本とつき合っていくか。

#### ＜4 通りになりうる沖縄人 ― その内在的論理とは？＞

そうすると、4 通りの沖縄人がそこから出てくるんです。1 番目、俺は沖縄人ではない。完全な日本人だ。沖縄なんて要素はないから、日本全体の利益ということから基地誘致するのはやむを得ないと主張する人は、過剰なまでに自分たちは沖縄人ではなくて日本人であるということを強調します。ただ、問題はこの過剰さなんです。過剰だということは、逆に自分は異質なんだということを抑圧された形で意識しているからです。ですから、こういう人は、逆に自分の思いというのが日本人として一生懸命やろうとしているのだけれども受け入れられないというときには、極端なナショナリストに振れる可能性があります。

2 番目、あんまり考えてない。3 年前までのウクライナ東部の人たちは、自分たちがロシア人かウクライナ人か考えてなかった。確かにルーツはロシアにあるかもしれないけど、ウクライナに住んでいるからね、これぐらいの感覚。沖縄人でも日本のパスポートを持っていたって、全然抵抗感がない。ただ、ルーツは沖縄だし、食の中には沖縄のものがたくさん入っているし、三枚肉の角煮を食べるとおいしいと思うし、それから沖縄そば、そばというときはそば粉が入ってないそばでもそばなんだと思う人。ラーメンよりは沖縄そばのほうが何となくおいしいと思う人、文化では沖縄があるんだけど、あまり考えたことがない。仮にこういう人たちを沖縄系日本人と呼ぶことにします。

ところが、それが最近少しずつシフトしている。ちょっと待ってくれ、俺たちのこと日本人同胞と思っているのか。あんまりひどいんじゃないのという気持ちがある。これはアナログカルに言うとういうことになります。1952 年に日本が独立したときに沖縄は切り離された。ちなみに日本人が沖縄は独立したいんですかと尋ねると、沖縄のかなり多くの人の中でまた 1952 年のときのように切り離すつもりなのか、こういうふうになる。ところが、沖縄の中では自己決定権があって、自分たちは独立できるんだけどもしない、こういう方向で日本とつき合っているし、状況としては独立なんだという議論も出てくる。同じようなことを日本人が言うと、お前らまた切り離すつもりかと言う。普通の日本人からすると、錯綜すると同時にだんだんイライラしてくるわけなんで

すよ。何でお前らは自分たちで言っているときというのはそうだと言っているのに、俺たちが同じことを言ったら。この非対称性を理解しないといけない。少数派と話をするのは難しいのはこういうところにあります。でも、その中において究極の選択になったら俺はやっぱり沖縄人だよな、そういう状況が来ないことは願っているけどねと、こういう人が今、ぐっとふえてきているんです。こういう人たちを日本系沖縄人と呼ぶことにします。怖いから沖縄人のアイデンティティーについての統計はどこともとらない。統計をとるときには最終段階になるからです。

それから4番目、我々は琉球人なんだ。日本と一緒にいいことは何もなかった。それだから即時民族自決権を行使して独立したいという人たちも、知識人の一部にはいる。しかし、大きな力にはなっていない。一番最初の過剰同化していると即時独立の人は、これは具体的な統計はないが、私が見るところ、大体同じぐらい。問題は、ボリュームゾーンは2番目か3番目なんだけど、今、圧倒的に3番目にシフトしているということなんです。

ちなみに、どこのところでメルクマールを見るかといえば、ロシアとウクライナで、こういうことなんです。ウクライナ人を相手に、ロシア人というのはとんでもない連中だな、今の21世紀になってもけつをトイレットペーパーでふくということを知らない。寝台列車に乗ってみろ。トイレの横にくずかごが置いてあるだろ、あそこはけつを新聞紙でふいた後で、それで糞のついた紙がたっぷり入っている。臭くてしかたない。こんな国が核兵器を持っているんだから、世も末だなと言ったときに、大体のウクライナ人は、今までロシアの悪口を言っていたんだけど、ふざけるんじゃないかねえ、お前からロシア人を軽く見てんじゃないかといって怒る。ということは、そのウクライナ人は自分たちはある分節下においてはロシア人と同じと思っているんです。

だから、沖縄人に対して外国人が日本人の悪口を言ったときに、沖縄人がそうだそうだ、これはとんでもない、俺もそう思うよと言うようになったら、これは最終段階。でも、今はそうじゃない。ちょっと待ってくれとなる。日本人を悪く言われると、自分が悪く言われているように感じる。そのあたりに無自覚な日本人か、沖縄の背後には中国がいる。金でも流れてんじゃないかねえか、というようなことを言うと面倒になる。全然事実無根の話、そういうふうに見えるやつがおかしいんだけど。あんまりそういうことを言われると、沖縄側からも売り言葉に買い言葉になるんだよね。ああそう、じゃお聞きしますけれども、中国は国家の脅威として沖縄の領域で何人殺しましたか。これは0人です。そうすると、日本は。1609年の薩摩の琉球入り、最近琉球戦争とかいう表現を使われるけど、それで何人殺した。アメリカだって殺している。こういう議論になってくる。歴史というのは、単に年表をつなげていくようなヒストリーだけではなくて、ドイツ語で言うゲシヒテ (Geschichte)、出来事をどうやって点と線でつないでいくか、こういうふうになっていくわけなんです。

こういう難しさがあるところで、今、すごく重要なのは、文化、特に小説を読んで沖縄の内在的論理を捉えることに努力する、こういうことだと思うんです。そして違うんだということを知る。そこ

でわからないことについて、何であなたたちはこう思うのという形で、2つのモノローグじゃなくて、1つのダイアログに近づいていくようなことを積んでいく、これが重要じゃないかなと思うんですよ。政治的には今、非常に煮詰まっている。それであるがゆえに、現在ではできるだけ政治から距離を置いて、文化に政治を包み込むという作業が私は必要とされているんじゃないかなと思います。

すみません、ちょっと時間を超過しました。私の話はここまでにします。イッペイニフェーデーブル（どうもありがとうございます）。（拍手）

司会 佐藤先生、ありがとうございました。実は超過どころか、ピタッとほぼ秒単位で終わっているというすばらしいタイムキープになっております。ありがとうございます。

続きまして、先ほどご紹介を申し上げました各先生方のご報告をいただきたいと思っておりますので、続けてご登壇をお願いいたします。

次のご報告は、大城貞俊先生になります。ご登壇いただけますでしょうか。

大城貞俊先生ですが、1949年のお生れであります。もと琉球大学で教えておられまして、そしてもちろんのこと、皆様これもよくご案内のことと思いますけれども、作家でいらっしゃる。県立高校、それから教育庁等の勤務経験もあらわれて、2009年から琉球大学へ、15年に定年退職されまして、教員としての活動のほか、その間、作家としてずっと活動をされてこられました。大変さまざまな受賞もされておられますけれども、具志川市の文学賞、それから文の京文芸賞、山之口獏賞、これも有名な賞ですね。ご存じかと思います。2012年には映画の「ひまわり」、全国公開されていまして、ごらんになった方もおられると思いますけれども、その脚本も執筆されました。近著に、大城先生の作品集であります『島影』、そして『樹響』という上下2巻のものが人文書館から出版されます。現在、沖縄国際大学の非常勤講師も務めておられます。

それでは、ご準備よろしいでしょうか。大城先生、続きましてご報告をよろしくお願いいたします。



## 問題提起 1

大 城 貞 俊

皆さん、こんにちは、ご紹介をいただきました大城です。私の考えを幾つか述べる前に、今日このようなシンポジウムが開催されることをとてもうれしく思います。

主催者の京都産業大学の丁寧な対応にも感謝したいと思います。

先ほど佐藤優先生の話聞いて、非常に勇気づけられました。来てよかったなと思いますが、私は沖縄の宜野湾市嘉数というところに住んでおります。ヘリコプターが落ちた沖縄国際大学も近くにありまして、普天間の基地もあります。また、背後の嘉数高台公園は、嘉数高地と呼ばれて戦争中大変な激戦地の1つなんですが、そこに住んでいます。

今日は沖縄を代表するということではなくて、沖縄で生まれて、そして沖縄で育った1人の人間として、自分の考えていることを少し述べたいと思います。

まず、佐藤先生のお話を聞いて大変刺激を受けたんですが、私は3つの視点、沖縄問題を考える上で、あるいは辺野古を含めた沖縄の状況を理解する上でとても大切な視点じゃないかと考えていますので、そのようなことからお話ししたいと思います。

まず1つ目は、沖縄問題を考えるときには想像力というのがとても大切じゃないかなというふうに思います。想像力というのは沖縄の人々の戦争体験、あるいは戦後の基地被害のことを想像力を使って考えてほしいということです。先ほど佐藤先生から、政治的な言葉も大切だけれども文学的な言葉への関心を有してもらいたいということがありましたが、まさにそのとおりだと思います。きょうは、私もそのことをお話ししようと思ってやって来ました。

想像力を使って戦争体験のこと、基地被害のことを考える例として1つずつ挙げたいと思います。まず戦争体験についてです。私の郷里は沖縄本島北部の大宜味村大兼久というところなんです。やんばると呼ばれている小さな村ですが、そこでも去る大戦で92名ほどの方が亡くなっています。村には小さな慰霊碑がありまして、亡くなった人たちの名前が刻銘されています。私は大学退職後、郷里の人たちの戦争体験を聞き取ることをやってみたいなと思ひまして、その作業をスタートさせました。そうすると、私が知らなかったことがたくさん出てきました。沖縄戦の体験については、皆さんも例えば集団自決だとか、あるいは戦後70年の現在もトラウマに悩まされているとか、そういうふうなことについてご承知だと思いますが、私は郷里の人々の戦争体験については、ほとんど何も知らなかったのです。

その1つにこんなことがありました。大宜味の人たちは戦前、南洋諸島に多くの人々が移住しまし



た。大兼久も小さな漁村で、南洋のパラオにたくさんの人たちが渡りました。パラオにはペリリュー島という全員玉砕の島があります。実はそのペリリュー島で自分の兄さんが亡くなった、父さんが亡くなったという方たちが何名かおりました。その玉砕の仕方がこういうことでした。沖縄の人たちは泳ぎが上手だろう。大宜味の人たちも漁師だと聞いているから、お前たちは泳ぎが上手だろう。ということで、ペリリュー島を囲んでいる環礁がありますが、そこまで爆弾を抱えて泳いで行き、そこに隠れていて米艦船が来たときにその爆弾を投げなさいというものです。これは自殺行為と同じですよ。人間魚雷と呼んでもいいと思いますが、そのような形で郷里の人々が戦死したということです。ほかに聞き取って大変びっくりしたようなことがあります。そのような戦争での死を、想像力を使って考えてもらいたいと思うのです。

基地被害については、文学作品でもたくさん取り上げられていますが、その中から1つだけ紹介したいと思います。宮古の詩人で与那覇幹夫さんという方がいます。与那覇幹夫さんの詩集に『ワイドー沖縄』という詩集があります。ワイドーというのは宮古の言葉で頑張れという意味です。その『ワイドー沖縄』という詩集の中に「叫び」という詩があります。この詩はどのような詩かというと、戦後間もないころ、宮古の農家に米兵がやってきます。11人の米兵が人家に上がり込み、夫の目の前で妻をレイプする。夫は羽交い締めになされていて身動きがとれない。その目の前で次々と米兵が愛する妻にのしかかっていく。そのとき夫は最後の1人のときに、「ワイドー、加那」、加那というのは妻の名前です。「ワイドー、加那、あと1人」、そういう言葉を発したというのです。そのことを題材にした詩です。与那覇さんはそのときの夫の叫びを思いやること、夫の妻に対する思い、言葉を越えた思いといいますか、究極の愛といいますか、「ワイドー、加那、あと1人」という言葉を取り上げながら「叫び」という詩を書いたわけです。

宮古だけでなく、そういう悲惨な出来事は沖縄の各地であったわけですが、そういう文学作品の中にある言葉に注目をして、沖縄の問題を考えてもらいたいと思います。先ほど佐藤さんがエンターテインメント作品は少ないという話をされましたが、そのとおりだと思います。沖縄文学の特徴の一つは状況に対して倫理的であるということがあげられます。芥川賞作家は4名出ていますが、いずれの作家も基地被害や戦争体験を文学作品として創出しています。大城立裕さん、東峰夫さん、又吉栄喜さん、目取真俊さん、この4名の作家の作品をぜひ機会があれば読んでもらいたいと思います。

さて、2つ目の視点です。2つ目は沖縄問題を考えるときに長い時間の尺度といいますか、歴史の尺度を持って考えてもらいたいということです。1609年に薩摩に侵攻されて以来、琉球王国は傀儡政権になります。その後、明治政府の傘下に入るときも琉球処分と呼ばれるような強圧的な対応の下、琉球王国を廃止して沖縄県をつくっていくということが行われます。そして戦後も、日本人になろう、いや、戦前も含めてですが、先ほど日本人になりたい沖縄人の話もありましたが、日本人になろうとして努力をする。その最たるものが沖縄戦だったと思います。この沖縄戦でも、沖縄の人々のそうい

う犠牲的精神は、戦後、日本政府から余り評価をされることがなかったのではないかな。ちょっと誤解があると困りますが、例えば戦争も捨て石作戦と呼ばれるような、あるいは本土の防波堤と呼ばれるような、あるいは二十歳にも満たない少年たちを集めてゲリラ隊を組織するというような、彼らは護郷隊と呼ばれてその多くが戦死しますが、そういう少年たちをも戦場に駆り出していきます。戦後沖縄県は、すぐに日本政府から切り離されて米軍政府の統治下に置かれます。その中で先ほど言ったような悲惨な出来事も起こります。沖縄の人たちは、基本的な人権を取り戻すためには祖国へ復帰する以外にないということで祖国復帰運動を起こしますが、その願いは基地のない平和な島としての復帰でした。しかし、それも叶いませんでした。

そして、今、辺野古の問題です。こういう長い尺度といいますか、歴史的な流れの中で現在の辺野古の問題、沖縄問題をぜひ捉えてもらいたい。日本との関係、日本政府との関係、沖縄の人々が米軍政府統治下で孤軍奮闘して、そしてやっと祖国という言葉を使いますが、沖縄は復帰した。しかし、その後の日本政府の対応はどうも沖縄の人たちにとっては余り望ましいものではなかったのではないかな。何度も何度も沖縄の人々は日本政府へ助けてくれというメッセージを送り続けている。そのような思いをぜひ理解してもらいたいと思います。

3点目の視点は、沖縄問題は、辺野古の基地の問題も含めて、沖縄の文化や習慣、貧困、そういうことを含めたトータルな問題として考えてもらいたいと思います。決して安保の問題だけではなくて、沖縄の人たちの生き方、あるいは私たちの生き方が問われている問題として考えてもらいたい、また私自身も考えたいと思っています。

沖縄のアイデンティティについては、先ほども非常に示唆的な話がありました。沖縄の人たちの心情や生き方をあらわす言葉にチムの文化、相手を思いやる心とか、イチャリバチョーデーといって、出会った人は皆友人だという言葉がありますが、私は沖縄の人々のアイデンティティは非常に流動的で、固定化されていない、そこに特徴があるのではないかと思います。世変わりの時代とともにつくられてきた沖縄の人たちのアイデンティティ、この流動するアイデンティティは、みずからと、日本国家を相対化し、考え続けるエネルギーにもなっているのではないかなという気がしています。

本日のテーマの沖縄問題と複合アイデンティティということに引き寄せて少しだけ補足しながら話をしますが、当然辺野古の問題でも、辺野古新基地建設に反対する人々と賛成する人々がいます。ただ、そのアイデンティティは時には国家権力によって、アメとムチ政策によってつくられてきた、そういうところもあるのではないかなというふうに思っています。今回の辺野古の問題で基地に隣接する3区に直接日本政府は交付金、お金を与えるということですが、そのようなことをされながら分断されてきた。アイデンティティは確立できずに、揺らいできた、揺すぶられてきた、そういう歴史というのがあるのではないかなと思います。沖縄の人々は、対立をあおられ、引き裂かれてきたと言ってもいいと思います。

沖縄では、年間 300 名余の人々が自殺をします。その背景には経済問題もあるでしょうし、貧困の問題もあるでしょう。さらに複雑な状況があると思いますが、そういう中で沖縄の問題を考えるということです。沖縄は死者とともにある文化です。死者の眼差しを忘れない多くの人たちがいます。沖縄戦で死んだ人たち、あるいは基地あるが故に被害にあった人たちの無念の思いをも担いながら、今、沖縄の人たちは辺野古で戦っているわけです。沖縄問題については、是非皆さんにも多角的な視点から想像力を働かせて考えてもらえたらありがたいなと思います。

ちょっと時間をオーバーしましたが、私の提言といいますか、考えているところを 3 点にまとめました。時間が足りませんでしたので、どうぞ言わんとするところをご理解ください。以上です。ありがとうございました。(拍手)

## 問題提起 2

木 谷 佳 楠

司会 大城貞俊先生、ありがとうございました。このセッションは時間が 15 分、15 分という形になっておりますので、急がせるような形になりまして、大変申しわけありません。また後でディスカッションのときにお話をください。

続きまして、木谷佳楠先生、ご登壇をお願いいたします。

木谷先生ですけれども、現在、同志社大学神学部の助教でいらっしゃいます。2012 年に同大学の博士過程を終了されまして、神学博士号を取得、そして日本学術振興会特別研究員でもいらっしゃいます。アメリカのジョージタウン大学客員研究員等を経て、2013 年より現職、専門は公共圏における宗教についてということでして、近年の研究テーマでも、移民・難民の宗教生活、マイノリティに対する構造的な差別の問題、そうしたことを扱っていらっしゃいます。

それでは、これはパワーポイントが入りますので、こちらにご移動いただきましたが、木谷先生、どうぞよろしくをお願いいたします。

木谷 このシンポジウムのお話をいただいたとき、私は正直「まいったな」と思ってしまいました。もしかしたら東郷先生も初めてお会いしたとき、私を見て「まいったな」と思われたかもしれません。私は若輩者ですので、どういう話が飛び出してくるのか、先生もご心配されたのではないかと想像しています。私自身が「まいったな」と思いました理由は、第一に私が沖縄の問題について専門的な知

識を持っていないからです。第二に、沖縄から見たら私はヤマトの人間ですので、私がヤマトの人間の立場でどういふことをどこまでお話しできるのだろうかと思ったからです。やはり、いま沖縄の人たちが味わっている苦しみや悔しさというものを、私は皮膚感覚で理解することができません。自分の置かれた立場で、わかる範囲のことしかお話しできないという、もどかしさがあります。わかったふりをしてお話しするのも大変失礼なことだと思っていますので、その点を意識しつつ、私にはお弁当の端っこにあるパセリくらいの価値はあるのかなと思いながら、きょうはここに立たせていただいています。

きょうは私の立場からお話しできる範囲で、3つの視点から皆さんと一緒に沖縄が抱える問題について考えたいと思っています。1つ目は、京都の大学で働く教師の視点から。2つ目は、日本キリスト教団という教会の牧師の視点から。そして3つ目は、私の研究分野である移民研究の視点から、特に日本と沖縄の間で今、揺れ動いているアイデンティティの問題について皆さんと一緒に考えたいと思います。

### ＜京都から見る沖縄＞

まず、京都の大学で教えている教員という視点からです。今回このようなシンポジウムで発言できる機会をいただきましたので、これはしっかり勉強しなくてはと思い、11月に沖縄へ行ってリサーチをしてまいりました。そこで見えてくるのは、京都の大学と沖縄の大学の間にある格差と隔たりです。幾つかの大学を訪れ、授業も聴講させていただきました。中でも特に印象深かったのは沖縄国際大学です。先ほども大城先生からご紹介がありましたように、沖縄国際大学というのは普天間基地の真横にある大学です。2004年には敷地内にアメリカのヘリコプターが墜落し、校舎の一部が炎上しました。今でも常に米軍機が沖縄国際大学の学生の上を飛んでいます。京都であれば考えられないことです。

沖縄国際大学では2コマの授業に午後から出させていただきました。3時間の授業の間、米軍機が頭上をゴーゴーと何度も通りました。それは体も震えるような音で、教室にずっといると頭が痛くなるような爆音でした。あまりの爆音で、時には教師の話がかき消されてしまい、授業が中断されてしまうほどの大きな音の時もありました。墜落するのではないかと心配になるような大きな音です。

### ＜沖縄ではオスプレイ、京都では比叡山が見える研究室＞

嘉手納基地の様子を動画でお見せします。このように大きな米軍機が頭上を飛んでおり、いつ落ちるかわからないような低空飛行をしています。普天間と嘉手納とではまた状況が違うかもしれません

が、これに類するような米軍機が沖縄国際大学の学生たちの頭上を常に飛んでいるのです。沖縄国際大学を訪れた際には、ある先生の研究室も見させていただいたのですが、この方の研究室からは普天間基地を見渡すことができました。つまりは、同じ建物にある教室から、学生たちにも同じように基地の光景が見えているということになります。もちろん問題になっているオスプレイも見えています。その光景を見たとき、現在の私が置かれている環境がどれほど恵まれたものであったのか、ということに気づかされました。

私の同志社大学にある研究室は4階の南側に位置しており、窓からは京都御所が見えます。北側の研究室からは相国寺や比叡山が見えます。御所と相国寺の間に位置する大学ですので、とても静かな研究環境が確保されています。一方、沖縄国際大学の研究室からは基地が見え、騒音を防ぐために一応二重窓にされていますが、それでも静かとは言えない環境です。今まで、自分がいかに恵まれている環境で研究ができていたのかということには私は気づいていませんでした。今回沖縄国際大学を訪れることによって、私の置かれた恵まれた環境というのは、実は基地を引き受けている土地に住む人たちの犠牲の上で成り立っているのだということを学びました。

### ＜京都で学ぶ学生の沖縄に対する心理的距離感＞

また、これも京都の大学での話ですが、昨年私の授業に辺野古問題にかかわっていらっしゃる方に講師として来ていただきました。講演の後に学生たちが書いたコメント用紙を集めたところ、「講師の先生の熱意についていけなかった」「ニュースを見ても辺野古のことがよくわからない」「そもそも興味がないから何が問題なのかわからない」「抑止力のためにも辺野古の移設は必要」というようなコメントがありました。さすがに講師の方に対して申し訳なく思いましたので、今年は私が沖縄についての授業をおこないました。このように京都で学ぶ学生たちの率直な意見を受けて、やはり沖縄に対する心理的距離感というか、温度差というものを感しました。やはり京都の学生にとっては基地の問題は沖縄の問題であって、自分たちの問題ではない、あるいは関係がないものだという意識があるのだと思います。そこには沖縄に対する構造的差別の問題が潜んでいるのではないかと思います。

構造的差別というのは、差別をしている主体が誰なのか不明確です。不明確なまま、差別を被っている沖縄という存在だけがあります。先ほど佐藤先生からもお話があったように、本土で、我々のこの環境で沖縄の差別の話になると、多くの人はどこか後ろめたさとか、何となく嫌な感じがするのではないのでしょうか。沖縄対本土という構図ができてしまっていますから、何となく自分たちが責められているような気になるのではないかと思います。何となく責められている気になると、一層拒絶してしまい、「基地で金もうけをしているのだからいいじゃないか」とか、「既に基地があるのだから、辺野古もついでに受け入れたらどうだ」というような考え方が出てきてしまうのではないかと思います。

### ＜教会というバッファゾーン＞

次に2番目の視点、キリスト教の牧師という視点からです。私は日本キリスト教団という日本では一番大きなプロテスタントの教団に属しています。沖縄では毎日辺野古の海を見張るために座り込みをしている牧師もいます。基地建設に抗議するため、「不屈」という名前の船を出して活動している牧師もいます。また、キリスト教以外の宗教を持つ宗教者たちと連携して、キャンプ・シュワブ前で座り込みをする人たちもいます。

一方で、沖縄にはこのような活動から完全に距離を置いている教会があります。それは基地関係者が通うアメリカ人向けの教会です。アメリカ人のキリスト教徒とも私自身はキリスト教というつながりがありますが、アメリカ人のキリスト教徒が基地問題について日頃からどのように思っているのか興味がありましたので、沖縄にあるいくつかのアメリカ人が通う教会を見てきました。沖縄におけるアメリカ人向けの教会は沖縄社会から見えにくく、統計データもありませんので正確にその数を把握することは困難です。また、人数は少ないですが、地元の沖縄の人たちも通っています。その方々というのは、主にアメリカ人と結婚した方やその子どもたちです。私が訪れたある教会では、サンクスギビングの特別な礼拝がされていました。

ある意味、教会というのは基地対地元という構造から少し離れて、衝突を緩和するバッファゾーン（緩衝地帯）のような役割を果たすことができるのではないかと思います。加えて、アメリカや諸外国に対して沖縄の問題を訴える上で、教会とのつながりを持つことや、キリスト教的なレトリックを使って沖縄の現状を外部に発信していくことは非常に効果的だと思います。沖縄にはアメリカ人が集う教会がありますので、そういうチャンネルを使わないのはもったいないのではないのでしょうか。なぜなら、キリスト教は国境という枠を越えて信仰でつながった人々はひとつの神の家族だという考え方がありますので、そういう考え方を軸にアメリカ人たちが通う教会にアプローチし、彼らから本国のアメリカに沖縄の声を伝えてもらうということもできるのではないかと思います。

ひとつの記事をご紹介します。1956年7月25日に出版された *The Christian Century* というキリスト教系雑誌に掲載された「Why Discriminate Against Okinawa?」（「なぜ沖縄を差別するのか？」）という記事です。宣教師によって書かれたこの記事は「アメリカ合衆国は沖縄をまるで植民地のように不当に扱いはじめている」とアメリカの沖縄に対する対応を批判しています。本土復帰前には沖縄にたくさんの宣教師たちがいました。その宣教師たちは「沖縄に対する差別を是正すべきだ」「どうして沖縄を差別するのか」というような記事を書いて、アメリカ本国に訴え出ることがあったのです。

欧米の政治家は、国家が危機に面したときなどの「ここぞ」という場面でのスピーチには、必ずキリスト教のレトリックを使います。例えば「光と闇」という対比を使ったり、「私はあなたたちと共



にいます」というようなキリスト教的なメッセージを述べたりします。最近中国もキリスト教の有用性に気がついたのか、2012年に中国が制作した南京大虐殺を描いた映画 *The Flowers of War*（日本未公開）ではキリスト教が効果的に利用されています。南京に日本兵たちがやってきて少女たちを襲いにくるのですが、その少女たちを白人のキリスト教の司祭が教会にかくまって守る、というような映画です。

一方で、もしかしたら日本政府もキリスト教の有用性に気づき始めているのではないかという出来事が先月ありました。中谷防衛大臣がハワイに行かれた際、大臣は非常に忙しいはずなのに、わざわざ日系教会を訪れています。そのことについてハワイで開いた記者会見でも言及していますので、現地でのイメージアップに教会を利用していると読むことも可能です。

### ＜沖縄のディアスポラ・ネットワーク＞

最後に、移民研究の視点からです。今、世界中に移民として渡って行った沖縄系の人たちをつなぐウチナンチュ・ネットワークというものが形成されています。1990年以降、5年に1度のペースで世界ウチナンチュ大会というものが沖縄で開催されています。県を挙げて世界中の沖縄系移民の人たちと沖縄がネットワークをつくろうと頑張っている活動をしているのです。そういうネットワークが現在、強固に形成されつつあるという実情は、移民研究の視点からも注目すべき点だと思います。

離散している民のことをディアスポラと言いますが、世界中に散らされた沖縄にルーツを持つ人々がディアスポラのネットワークをつくっているのです。沖縄系移民の人たちは複雑なアイデンティティを持っています。1906年に初めての移民船が日本からブラジルへ渡って行ったとき、船に乗っていた人の約4割は沖縄の方でした。戦前、戦後の非常に貧しかった時期にも、多くの人が移民として南米に渡って行かざるを得なかった状況がありました。向こうでは日系、Okinawan と呼ばれて差別を受け、その人たちの子孫が今度は日本に帰ってきた際、ブラジル人、ペルー人と呼ばれ、また差別の構造の中に入れられてしまいます。常に社会の底辺に置かれ、一体自分たちは何者なのかという大きな問いを持つことになります。現在、その問いに対して、沖縄系の人たちは「自分たちはウチナンチュだ」と強く主張しているような気がします。対立構造が生まれたとき、複雑なアイデンティティを持つ人は自分がどこに立つのかということを選ばなければいけません。非常に厳しい問題です。

### ＜本土対沖縄という対立構造を越えて＞

最後に言わせていただきたいことは、沖縄の問題を解決するに当たっては、本来は本土対沖縄とい



う対立構造があつてはいけないのだということです。この構造では沖縄に対する差別はなくなりませんし、いつまでも沖縄というのはトカゲの尻尾切りのように犠牲にされ、差別を受け続けるのではないかと思います。それに対して私が言いたいのは、これを本土対沖縄ではなくて、アメリカ対日本という構造で捉えなければいけないということです。2015年度の在日米軍関係経費の予算は5,197億円です。新しいオリンピック・スタジアムの1,500億円が高いと言っている場合ではないということです。国民の税金がここに使われています。そのことを私たちは認識しなければならないと思います。

また、時間の関係上詳しくお話できませんが、京都にも実は米軍基地が建てられました。後ほど詳しく岩本先生からご説明があるかもしれませんが、京都の最北端の京丹後市にアメリカの軍施設があります。どうしてこんなことが許されるのかと思いますけれども、こういう現状がありますので、基地問題は沖縄だけに押し付けるのではなく、私たちも共に担っていかなければならないことだと思います。

私たちがこれからも共生していくということを考えるときに、本土、沖縄という対立を超えて、平和を希求する民としてのアイデンティティを一緒に持つ努力をしなければならないのではないかと思います。どうもありがとうございました。(拍手)

## 問題提起 3

岩 本 誠 吾

司会 木谷先生、どうもありがとうございました。本当に短い時間でしゃべっていただきまして恐縮です。

続きまして、本学世界問題研究所の岩本先生にご登壇いただきます。岩本先生は、1956年生まれでして、神戸大学大学院博士課程の後、防衛庁防衛研究所の所員を経て、2004年より現職になっています。国際法専攻の先生ですけれども、特に軍事、安全保障、武力紛争という分野を研究されています。最近、サイバー戦、無人機及びロボット兵器などのことに関しましてさまざまなご発言をされておられまして、新聞等でもごらんになった方がおられるかと思います。そういった技術革新と国際法との関係について関心をお持ちです。

それでは、岩本先生、どうぞよろしくお願いします。

岩本 ご紹介いただきました京都産業大学法学部、岩本でございます。私は国際法を専攻しており

ますので、本日の発表は、「国際法・国際政治から沖縄アイデンティティを考える」という題で報告させていただきたいと思います。

初めに、現状認識と結論を先にお話しします。先ほどから佐藤先生、大城先生、木谷先生も言われておりますように、沖縄人の怒りは、沖縄人以外の無知・無理解が最大の原因であります。ですから、1609年の薩摩侵攻から、1872年からの琉球処分、1952年のサンフランシスコ講和条約、それから日本復帰後の沖縄の状況。日本国土の0.6%の沖縄の土地に74%の在日米軍基地があること。5万人の在日米軍のうち、2万6,000人が沖縄にいます。また、米軍関連の事件・事故が多いときには、年間1,500件もあること。我々はこういった事実をなかなか理解していないことが、沖縄人の怒りの原因ではないか。

最近は、「イデオロギー」よりも「アイデンティティ」という言葉が言われ、「沖縄アイデンティティ」の議論が出てきました。その発展型として「沖縄の自己決定権」という議論、さらに「沖縄独立論」という議論も出てきました。それらの議論が、沖縄以外の人の反発を買って、沖縄は独立するのか、けしからんという議論を呼ぶ。また、沖縄人以外の反発が、さらなる沖縄人の怒りを買うということになり、沖縄人と沖縄人以外との相互不信の連鎖が続いているのではないか。この連鎖が日本国内の政治不安定化につながる、私はそれを一番危惧するところです。

結論としては、沖縄人以外の方が沖縄のことをしっかり理解することが、沖縄問題を考える前提であります。我々は、沖縄の歴史をあまりよく知らないし、皮膚感覚もない。また、米軍基地問題も十分よく認識していない。我々は沖縄の置かれた状況を少しでも知識として知る必要があるだろうというのが前提でございます。そこで、沖縄の人と沖縄以外の方が相互に理解し合って、余り過激で急進的な議論ではなくて、もう少し穏健な、ステップ・バイ・ステップの議論をして沖縄問題の解決策を追求することが必要ではないかというのが、本日の私の発表の中核でございます。

まず、国際法の視点からちょっと問題になるというか、国際法を専攻していて私が一番気になるのは、翁長知事が今年（2015年）9月22日の国連人権理事会で行った2分間のスピーチです。そこでどういうことが言われたかということ、基地問題に関連して「沖縄の人々の自己決定権がないがしろにされている」、と。「沖縄の人々の自己決定権」、これは、英文では「Okinawans' right to self-determination」です。Self-determinationは、国際法の教科書にもよく書いてありますが、国際法では「人民の自決権、right of peoples to self-determination」と言います。翁長知事の発言「自己決定権」と国際法の用語「自決権」は英語表記では同じですが、同じ意味で使われているのか、国際法を専攻している私は非常に気になります。

一般的に、自決権といいますと「外的自決」、これは植民地支配か外国人支配の下で従属した人民が武力闘争して独立を勝ち取るための権利です。1950年代、60年代のアジア・アフリカ諸国の独立を見れば、そういった傾向があります。「外的自決」は国際社会的には一旦解決したといいますか、

多くの植民地が独立して「外的自決」の議論は終わりました。最近では、自決権のうちの「内的自決」、これについて学説の対立があります。一方で、所属国内で政治的・経済的・文化的発展を自由に追求すると理解する学説があります。これは、国内の問題ですが、他方で、内的自決が完全に否定されたという場合には「分離独立」もあり得るとする学説もあります。国際法の学会では、国際法上「分離独立権」を認めるか否か、学説的にはまだまだ論争されています。

実際、非植民地化以外で独立を勝ち取った事例として、例えば、パキスタンからバングラデシュが分離したとか、旧ユーゴスラヴィアからスロベニアやクロアチアが、91年にはエチオピアからエリトリアが独立した事例があります。これらの事例は、既存国家内から分離独立した成功例です。ですから、翁長知事が「国際法上の自決権」という意味で使われているかどうか、「内的自決」の分離独立を主張されているのか、私は非常に関心があります。

沖縄は、今、国際文書の中でどういうふうに議論されているかといいますと、日本が当事国になっております国際人権規約の自由権規約の関連で言及されています。毎年、日本は、自国の人権履行状況を報告しますが、それに対して自由権規約委員会は、その報告を受けて、最終見解を示します。自由権規約委員会は、先住民族の権利に関して「アイヌの人々の先住民グループとしての承認を歓迎する一方、琉球及び沖縄人というものを（日本政府が）認めていないこと…に対して懸念を改めて表明する（CCPR/C/JPN/CO/6、第26項、2014年8月20日）」。アイヌの人々の言語とか文化を奨励するようにとの勧告も出ています。また、日本が当事国であります人種差別撤廃条約でも、琉球/沖縄の状況に関して、人種差別撤廃委員会は日本の報告書を受けて最終見解で次のようなコメントを出しています。「委員会は、ユネスコによる独特な民族性、歴史、文化及び伝統の承認にもかかわらず、琉球/沖縄を先住民族として承認していない締約国（ここでは、日本政府のことを指す）の立場を遺憾に思う（CERD/C/JPN/CO/7-9、第21項、2014年9月26日）」と述べております。日本政府は、琉球/沖縄人を少数民族や先住民族として認定していません。NGO（非政府団体）の中には、沖縄人を先住民族として認定しろという議論がありますが、日本政府はそれを認めていないということでございます。

ですから、自決権という議論も必要だと思いますが、我々は、まず、日本国内で沖縄の人、沖縄人が少数民族か、先住民族かという議論をしっかりと議論する必要があるのではないかと。日本政府と沖縄が対立しているとか、沖縄県の中でも色々な意見が対立しているというふうに聞いておりますけれども、一度、我々は民族とは何か、少数民族、マイノリティとは何かという議論を改めてしなければいけないのではないかと。

そのような議論の中で、例えば、国連文書の中に「先住民族権利宣言」があります。これは国連総会が2007年に採択した決議文書（A/RES/61/295）ですが、先住民族には自決権（第3条）とか自治権（第4条）があります。しかしながら、主権国家の領土保全又は政治的統合を分割し、若しくは害

してはならない（第46条）。要するに、主権国家の枠は尊重しなさい、と。その中で先住民の文化とか、伝統とか、言語とか、土地の問題とかを保障すべきだということです。私が専攻している国際法は、国家主権を前提にしておりますから、どうしても国家主権を侵害し揺るがすようなことに対して非常に保守的な法体系になっています。マイノリティ（少数者）とか先住民族の権利を認めたとしても、それらはどうしても主権国家の枠内であるということを、国際法は言っております。

多民族の国家は、世界では一般的であります。日本でもアイヌ民族が存在しますし、複数民族の存在と国家統合は、決して対立・矛盾しません。民族が複数いれば、必ず分離独立しなければならないというわけでもありません。私はよく授業のときに使う例として、民族と国家は玉ねぎと一緒に、何枚剥いても切りがない。例えば、ユーゴスラヴィア内のセルビアが独立し、さらに、セルビア内のコソボが独立し、何回独立してもきりがない。しかし、それはその地域の意思の問題です。それは当事者の意思の問題ですから、独立もいいことだと思います。が、しかし、極端な人権抑圧の場合を除いて、その問題を国際法の枠内で考えると、武力による分離独立を繰り返すことは、国際秩序そのものが非常に不安定になるのではないかというのが、国際法の立場だと思います。

ですから、翁長知事が国連の人権理事会で発言された「自己決定権」が国際法上の「自決権」と解釈されて、それが昔の植民地支配からの独立といった即分離独立と誤解される恐れがあるのではないかと。言葉が一人歩きしてしまって、誤解を受けているのではないかと。ですから、例えば、自治と言った場合に、地方自治権の拡大とか道州制、今、大阪都構想が言われていますが、日本も今の都道府県の中央集権制でいいのか、道州制とか、それをもう少し広げて連邦制という議論もあっていいのではないかと。連邦制までは国家という一つの法主体ですけれども、それ以上になると、法主体が2つに変わります。「国家連合」という考え方もありまして、統治機構の一部分共通にするが、二つの国家が別に存在するという考え方です。さらに進んでいくと、普通の二つの独立国家となります。このように、自治や自決に関して、さまざまなステップがあると思います。「自己決定権」はどうしても誤解を受けて、すぐ独立するのか、と誤解されてしまいます。そうではなくて、やはりステップ・バイ・ステップで状況を見ながら、ここでは無理だから次の段階でという段階を踏んでいく議論が必要ではないか。それが、沖縄の自治拡大・自己決定に関する私の考えです。

次に国際政治から見ますと、ここで（次ページ図）見ていただいたように、日本列島の南西諸島がちょうど大陸から太平洋に進出するときにふさがっているお椀みたいな形になっています。



2008年に中国の軍司令官が「太平洋分割論」を発言したときに、あれは軍人（少将）の個人的発言だから、政府見解ではないと、中国は言っていました。しかし、2013年5月18日に習近平国家主席がケリー国務長官に対して、「米中二国間は太平洋に面しており、広い太平洋は両国を受け入れる広い空間がある」という発言をしています。沖縄は、ちょうど南西諸島の真ん中にありまして、中国の「接近阻止・領域拒否（A2AD）戦略」の第一列島線上にあります。中国が2005年に制定した「反分裂国家法」によれば、台湾が独立を宣言した場合には、非平和的な手段により鎮圧（すなわち、武力鎮圧）すると言っています。来年（2016年）1月16日土曜日に、台湾の総統選挙があります。最近の新聞報道では、民進党の蔡英文氏が当選するのではないか。そうすると、どうしても東シナ海は一層緊張するのではないか。ただでさえ、東シナ海および南シナ海が緊張している状況にある上に、です。そういう意味では、先ほど沖縄の戦略的な位置に言及しましたが、やはり我々は沖縄の戦略的価値を再評価せざるを得ないのではないか。

まとめとしては、私が重要と考えていることは、沖縄の人と沖縄以外の人との融和のために、そして、日本の政情安定化のためにどうすればいいのかということです。それは佐藤先生の「原因と結果」も考えないといけないと思いますが、まず緊張した東アジア情勢の中で沖縄問題により日本国内の政治が不安定化すれば、誰が得をして、誰が損するのか。安全保障面から、日本は損をするし、



東アジアも損をする。ですから、沖縄問題を「沖縄系日本人と非沖縄系日本人との関係」、すなわち、日本人同士の中での議論に留めておき、対立概念としての「沖縄人と日本人との関係」、すなわち沖縄人と日本人が別の人格として対立する関係にあくまでシフトしないように努力しなければならないということです。

私の結論は、日本の安全保障問題は日本国内の日本国民全員で考えるべきであるということです。ですから、沖縄にある米軍基地も本土に衡平に移せばいいし、移せるものは移せばいい。先週ですけれども、12月17日に全国知事会が、京都の山田知事が会長ですが、沖縄の基地負担軽減問題について知事会で検討すると決定しました。沖縄の戦略的な位置を再認識すれば、沖縄の米軍基地はどうしても外せない、沖縄からの米軍の軽減はあっても、その完全撤退はできないのかなと思います。米軍基地負担を全国的に分散化し沖縄の米軍基地の負担軽減を促進することが、沖縄問題の解決を探る一つの手だてになるのではないかというのが、私の報告の主旨です。

どうもありがとうございました。(拍手)

**司会** 岩本先生、ありがとうございました。

これまでご報告いただきました各先生方、ありがとうございました。

それでは、ここで2部に移る前に一旦休憩をとりたいと思いますが、幾つかアナウンスがあります。2部のほうですが、大変恐縮ですけれども時間を、終わりのほうをきちんとするために、40分からのリスタートというふうにいたします。その後30分、30分、30分というタイムテーブルのもとでパネルディスカッション、そして学生との議論、そして聴衆の皆様との議論というふうに移っていきたいと思っております。その時間を取るために少し短くなりますが、ご協力をお願いします。

大事なことがあります。お手元のほうに質問シートというものがあると思います。封筒の中に入っている小さいものですので、それをお出してください。この休憩時間が短い中で大変恐縮なんですけれども、質問のある方はここに書いていただきまして、学生含めて、教員含めて4名ほどが回収にウロウロと回っておりますので、ああいう形で箱を持って回っておりますので、書かれましたら順次お渡しください。それをもとにして聴衆の皆様との質疑応答の時間というのを最後にとりたいと思っております。

ということで、40分スタートです。質問の記入のほうをよろしく願いいたします。



## 第二部 パネル・ディスカッション

司会 ディスカッションに参加するメンバーの準備を待っておりますけれども、40分過ぎましたので質問票のほうはここで打ち切らせていただきます。実にたくさんの質問をいただきまして、ありがとうございます。後ほどそれに基づいて最後のところで質疑をディスカスタントの先生に投げかけたいと思っております。しばらくお待ちください。

それでは、そのまま壇のほうにお上がりください。よろしくお願いします。

それでは、ただいまより第2部を開始いたします。

今、私の手元の時計で43分なんですけれども、5分押しというふうに見まして、本来40分スタートということでしたが、45分スタートの計算で5分ずつ延ばすということで基本的には見てまいります。

この後は、世界問題研究所所長、東郷がそのまま司会を務めまして、講演者、パネリストとともに討論してまいります。これが30分の予定です。

それでは、東郷先生、15分までという予定でよろしくお願いいたします。それでは、バトンタッチいたします。

## パネラー間のディスカッション

東郷 よろしく申し上げます。東郷でございます。30分まず基調講演者とパネラー同士のディスカッションを行いたいと思います。

それでは、最初に佐藤さんから基調講演があって、それに対して3人のパネリストからコメントがありましたので、そのパネリストのコメントに対して、基調講演者としての佐藤さんがどういう印象を持ったか、特に例えば最後の岩本先生の自決権と自己決定権、なかなか難しい問題提起がされましたので、そういう点を含めて、まず佐藤さんからコメントをお願いして、その上で各パネラーからまた議論するというふうに持っていきたいと思います。

佐藤さん、よろしくお願いします。

佐藤 佐藤優です。

まず大城先生のお話で、3つの視点は非常に説得力がありました。それですから、ぜひ皆さんに『椎の川』という大城先生の書かれた小説を読んでいただきたい。まさに沖縄戦のときの北部、今まで扱っていなかった話、そこのやんばるの中でなおかつハンセン氏病にかかった人、その人に対する

対応、それが女性だからジェンダーの問題を含む複合的な構造の中での差別と戦争の問題について扱った非常にいい作品です。しかもその結論も最後にある一言で終わっているんだけど、複数の読み方ができる。こういった優れた作品を読むことによって、想像力を強めてほしいと思います。

それで、時空を溶かす。沖縄戦というのは、例えば私の母も沖縄戦経験者です。最後に手榴弾2発渡されて、ガマ（壕）の中で自決しようとして、手榴弾のピンを抜いた。サンゴ礁の壁に当てたら、3秒から5秒で爆発するんですよ。その直前のところを北海道出身のアヤメという名の髭ボーボーの「山部隊」に所属している伍長が、死ぬのは捕虜になってからもできるというて手を挙げたから救われた。家庭の歴史の中でそれを語るでしょう。私はちょっと学生運動に深入りして、これだったら内ゲバとかやりかねないと母が思ったのですが、そういう子になるのだったら、私はあのときに手榴弾が爆発していると思えばあんたは生まれてないのだから、殺して死ぬというて脅された、こういうような経験があるわけです。そのことを書いたら、私が檻にいるとき、隣にいた連合赤軍の坂口弘さん（確定死刑囚）が感銘を受けて手紙をくれたりして、こういうコミュニケーションができるのだから、時空を超えることはできるわけです。私にとって沖縄戦は過去のことじゃないんです。今のことなんです。この辺の時空の解き方をつかんでいただくことが、沖縄を理解するときのかぎだと思うんです。

それから、木谷先生の話の中でおもしろかったのは、日本基督教団のような主流派の、どっちかという頭でっかちの教会ではない、むしろ根本主義者（ファンダメンタリスト）的な教会、こういうようなところの持っている力、普遍的な力というのが、アメリカとの間において共通の価値観というところでの力になるという示唆です。そうすると、レトリックをどういうふうにして使うかが重要になります。そういえば、沖縄戦の後、首里でほとんどの建物が形もなくなっていたんだけど、教会堂だけはコンクリートでつくった外形だけ残っていましたね。あの戦争の中でも教会を攻撃するということに対しては、アメリカ人はやはり自制が働いたんでしょう。今、その話を聞きながら。そうすると、我らキリスト教が足場にある人間は、そこをを考えないといけないなと思いました。これはぜひ伝統仏教の方たちにも考えてほしい。沖縄の場合はトートーメーという独自の祖先崇拜があるけれども、形の上では浄土真宗が強い。京都においては浄土真宗が非常に強いし、禅宗も強いし、あるいは沖縄では創価学会が大変な力があるから、こういうような宗教で、政治とは異なる価値のところで沖縄との共通の言葉を持っていくということは非常に重要です。今から61年前の12月2日に『人間革命』、池田大作氏のあの小説の一番最初の部分というのは沖縄で書かれたということ、やはりそここのところというのは非常にシンボリックな意味合いがある、創価学会にとっての沖縄というのも一つのテーマになるなと思ったんです。

それから、岩本先生の話は非常におもしろかったです。それと同時に、バングラデシュの独立のプロセスは、私がすごく仲よくしていたKGBの中将さんが担当していました。うまくあそこでパキス

タンを分裂させる工作をした。その人がおもしろいことを言っていた。「中世の格言が今でも生きているんですよ、佐藤さん。必要は法律を知らない」と。そう考えてみると、バルト3国の独立も、ソ連の連邦構成共和国の独立も、ソ連憲法の中では連邦構成共和国は主権国家だからソ連邦から離脱する権利があると書いてあるんだけど、離脱に関するソビエト法があったんですよ。協議をやって、こういう手続で離脱する。どの国も一つも守ってないで、事実上ソ連から新しい国家が独立した。となると、恐らくは政治のダイナミズムが強くなるときには、吹っ飛ばすような事実のほうが先行すると思うんですよ。その後、どうやって理屈をつけていくのかなという話になる。それで端的に今、岩本先生がおっしゃっているところでの自己決定権はどちらなのかと言ったら、翁長さんの考えは自決権ですね。自決権は持っているんだけど、その中で我々は自発的に日本にとどまっているのだ、という考え方ですね。ただ、それは日本の側が独立と言うときは再び切り離すのか。お前ら一回我々を1952年に独立させたじゃないかという沖縄の受け止めになる。翁長さんの言っていることを論理で整理すると、そういうことになるんじゃないかと思うんです。ですから、非常に売り言葉に買い言葉的なやりとりになると、ものすごく分離に向けたプロセスが加速しちゃう、そんな感じがしますね。以上です。

東郷 ありがとうございます。今の佐藤さんの発言に対して、岩本先生いかがですか。

岩本 私が一番ドキッとしたのは、「必要は法律を知らない (Necessity has no law.)」という言葉です。国際法の格言でも、「法は事実から生まれる (The law arises from the facts.)」とか、「権利は不法行為から生ずることなし (A right cannot arise from a wrong.)」とか、相反する2つ格言があります。状況によりどちらでも使えるようになっていますが、やはり既存の法制度が崩れて新しい法制度が生まれるときはあります。ただ、いつ新しい動きが主流になるか、それによって新しい法律が生まれていくのですが、まだ、「内的自決」の分離独立権があるという議論は、国際法の学説の中で圧倒的多数の主流派になっていません。今、論争中です。事実が重なっていけば、すなわち、国家実行が重なっていけば、それは新しい法律をつくる可能性があるということは承知しております。ただ、先ほども申しましたように、非植民地化以外でもやはり事例があるということで、それについては、今後、ほかの例も見て、国内での分離独立権が存在するのかについて勉強していきたいと思います。

先ほど佐藤先生が「必要は法律を知らない」と言われましたが、そうすると、国際法は要らなくなるのか、と。それでは、国際法を専攻する者としてちょっと困ります。

以上です。

東郷 非常に難しいというか、議論が先鋭なところに近づいているように思うんですけれども、その関連で私も佐藤さんに質問があるのですが、その前に木谷先生、大城先生、佐藤さんのされたコメントに対していかがですか。

木谷 今回の沖縄のアイデンティティについて考えるときに、沖縄の人たちのアイデンティティが

現在揺れているということに気がついた最初のきっかけは、非常に身近な例からです。それは佐藤先生です。2、3年前まで佐藤先生は公式の場に出るときはスーツを着ていらっしゃったのですが、最近、正装はいつもかりゆしウェアです。そのときに佐藤先生のアイデンティティが、今、沖縄のほうに傾いているということに気がつきました。

佐藤先生、大城先生、岩本先生のお話をお聞きして、3点お伝えしたいことがあります。まず1点目、佐藤先生に象徴されるように沖縄のアイデンティティが揺れているということ、それから2点目、沖縄のアイデンティティを考えると、日本人が一体何者なのかということも同時に考えなければいけないということ。

それから3点目、今後、沖縄を考える上で非常に関心があるのは、このままだったら沖縄はどこに行くのか、というところです。沖縄はエコロジカルで非暴力であるということもアイデンティティの一つだと思うのですが、辺野古での対立が非常に先鋭化してくると、今後は過激な集団があらわれてくることもあるのではないかと心配しています。その点、つまり今後沖縄が向かう方向について、佐藤先生にお聞きできればと思っています。以上です。

**大城** ありがとうございます。ご3名の発言を聞いて、私は今、沖縄の状況は非常に緊迫した、そして突破口の見えないようなそういう状況がありますが、それに対してのヒントを得たような気がします。

沖縄の状況について少しだけ述べますと、戦後70年間、沖縄は大変苦しい思いを担ってきました。平和な島の建設を願って頑張ってきたわけです。戦後70年間の歴史をこれからの70年で再び繰り返したくないという思いがあって、現在のそういう状況も生まれているんじゃないかなと思います。例えば安保が必要なら国民全体で相応の負担をしようじゃないかとか、あるいは分離独立についてはもう一回考えようじゃないかという岩本先生の発言や、あるいは佐藤先生の流動するといいますか、民族ということについての概念にも非常に多くの示唆を得ました。

沖縄は戦後70年からたくさんのことを学びました。ちょっと言葉はきついんですが、日本政府は沖縄からどういうことを学んだのだろうかという気がします。また同じ70年を繰り返すのじゃないかという懸念があるんです。例えばもう少し短い視点で言いますと、20年ほど前に大田知事が土地収用の問題で代理署名を拒否して、国が裁判に訴えて、そして沖縄県は敗訴しました。同じような状況が今、また起こっているのではないか。この20年間の出来事を見ても、沖縄県民にとっては納得できないことが多くて、やはりこのまま進むとある意味沖縄県民にとってももう一度、沖縄のあり方を見直すという、そこまで突き進んでいくんじゃないかという懸念も抱えています。

**東郷** 実は私が佐藤さんに伺いたかったのもまさにその点で、きょうのこれまでの議論で建設的、お互いに聞いてよかったという視点はたくさん出たと思います。にもかかわらず、今の沖縄の現状というのがある種の不安な状況に押し詰められているという感を多分出席者はみんな拭えないので、こ

ここで述べられた建設的な視点が間に合うのかというような懸念というのがあって、佐藤さんがその辺のところを、現状をどういうふうに見ておられるかということを含めて、今、4人が言ったことに対するコメントをお願いします。

**佐藤** まず岩本さんのお話ですと、沖縄と日本という関係だけから見ているのじゃなくて、スコットランドと英国の関係で見ていくとおもしろいと思うんです。恐らくはイギリスの大多数の人たちというのは、スコットランド人を除いて、スコットランド対イングランド人というかウェールズ人、こういう分節化対立項をなくして、連合王国ですからスコットランド系の連合国臣民とイングランド系の連合国臣民という対立にとどめたいと思っているんですけれども、それはイングランド側の希望的観測で、スコットランドはそう思っていない。だから、スコットランド国民党の党首は国政選挙に出ないんです。スコットランド議会の選挙にしか出ない。これはバルト諸国でも、バルトの共和国選挙には出るんですけれども、ソ連の選挙にはバルトの政治エリートは出なかった。そうなると、沖縄において、国会よりも県会議員になりたいと政治エリートが思うようになると独立は近づく。

それからさらに、独立というのは私は草の根からの運動とは全然見ていません。自分がいろんな独立運動を見てきた中でそういう確信を抱いています。これは県会議員が国会議員になりたいと思って、県知事が大統領になりたいと思ったときに起きる運動です。政治エリート、文化エリートが自分の温かい地位をより強化できると考えたときに起きる運動で、大体独立の結果、民衆の生活は不安定になり悪くなっているんです。しかし、エリートの生活はよくなっているんです。翁長さんはそういう野心はないし、あの人は日本の一員としてどうやって沖縄をとどめるかということ、それから安保体制をどうやって維持していくかということに必死になっている。その意味においては、沖縄の急進的な人は翁長さんを批判するし、あるいは私に対する批判でも一言言うと「トロイの木馬」だということです。要するに日本に沖縄をつなぎとめて、なおかつ日米安保同盟というものを維持するために、沖縄に寄り添うようにしながら、本質においては日本の利益を体現しているんだ。

最後の日本の利益を体現しているというところは間違いであって、前者は正しくて、日本と沖縄の利益を体現しているつもりです。沖縄だけが生き残ろうとして島嶼国家で独立国としてやっていくのは、できるけど大変です。その場合は、アメリカと中国と日本という帝国主義国のどれかへの依存度を強めないといけない。そのときに日本がレッサービル（より小さい悪）であるということは自明と思うんですけれども。そんなことないよ、日本は相当悪いよという議論もあります。

それからあと、危険な話ということなんですけれども、沖縄は実は大正時代に日本の全都道府県の中で唯一県庁焼き討ち事件があった県ですからね。これは地方公務員が当時の中央政府の差別政策に不満を持って、火をつけたわけです。それからコザ事件があった。あのときも車をひっくり返した。それからあと、東京タワーにおける宣教師を人質にする拉致籠城事件があった。いずれも死者は出ていない。しかし、その死者が出ていないことをどう評価するか、沖縄に平和主義が根づいているから



死者が出なかったと考えるのか、あるいはもし死者が出た場合に、圧倒的に強いアメリカや日本を相手にした場合、その報復で何がやられるか、それは想像がついているから。例えばチェコで第二次世界大戦中にハイドリッヒという総督を暗殺した、その結果二千数百人も殺された。リディツェなんていう村は完全に潰された。でも、それ以上殺さなかったのはどうしてかという、労働力が不足するから。日本もアメリカもそういうことをするだろうという感覚は何となく我らの中にある。だから殺さないということは、殺さないという文化が根づいているという形で沖縄は説明するのだけれども、その背後にはリアリズムがある。うんと強いやつを殺したりしたらどういう目に遭わされるかということを感じているからと思うんです。だから、僕が今、一番恐れているのは、死者が出ることなんです。

ところが、例えば沖縄人が真面目に、一昨日も大田昌秀元知事と会って話してきたんだけど、命を沖縄のために捨てるという運動をやってはいけないのです。今、我々の中にあるすごい誘惑は、辺野古のあそこのゲート前で焼身自殺を例えば私がする。そうすれば世界に報道される。私は別にやっても構わない、本当にそう思っている。そんなのちょっとした行き違いがあって、鈴木宗男事件のときに外交史料館から飛び降りて死んでいたとしても同じことだから。そういうようなことをした場合というのは世界で報道されるし、一応作家だし、ここまで思い詰めているのかということが大きなうねりになるかもしれない。チョコがソ連から距離を置くんだったら、ヤン・パラフが焼身自殺したからだから。でも、こういう運動をやってはいけないと思う。どうしてか。我々は沖縄に来た日本兵たちというのは、日本の国のために命を捨てる気構えを持っていたわけです。それゆえに住民虐殺を平気でできたわけです。自分の命を捨てるという気構えができ、そういう運動というのが広がると、他者の命を奪うということのハードルが著しく低くなる。それだから、命を本当に大切にするというのは、ある状況においては命を捨てたほうが運動の目的には合理的だと思われる場合においても、命を大切にしないといけないという超越的な命題として捉えないといけないと思っているのです。

しかし、そこのところが沖縄は根性なしだと誤解されては困るわけなんです。非暴力なのは非暴力の合理的計算がある。その意味で翁長さんがアナロジカルに見ているのは、マハトマ・ガンジーの戦いだと思う。これは決して根性なしじゃないということなんです。

それからあと、東郷さんの質問と皆さんのと共通すると思うんだけど、やはり日本人対沖縄人の二項対立はつくってはいけない。それは政治的に沖縄が負けるからいけないというマキャヴェリスムだけではなくて、事実じゃないから。ただし、日本と沖縄の間の二項対立があって、それは日本の政治エリートと、すなわち国会議員、官僚とそれからその周辺にいる政治部記者たちと沖縄全体の二項対立はある。それはどうしても国家を統治するという観点のところから安全保障の観点のみからで、要するに蛍の光だって先のほうに行けば「蛍の光、窓の雪」じゃないでしょう。「千島の果ても沖縄も、八洲の内の護りなり」でしょう。今は歌わないけれども。あれは国防歌の一つですよ。そ



いう意味での国防のための捨て石としての沖縄という発想が、僕も外交官だったからある。外務官僚の職業的良心に基づいて仕事をするのだったらそういう発想に立ったかもしれない。ここと沖縄の間では二項対立があるわけなんです。となると、政治エリートが歩どまりについて理解するとか、政治エリートが本当に追い詰めた場合に少数派がどういうふうになるかということの健全な想像力を持つことなんですよ。

この想像力を野中さんにしても、梶山さんにしても、橋下さんにしても持っていた。裏返して言うと、究極的に自分たちにとってマイナスであるという合理的な計算があるからやっていた。だから、野中さんや梶山さんが沖縄から本当に尊敬されているのかというと、そんなことはないですよ。この人たちというのは最終的には札束でほったをひっぱたいて基地を受け入れさせるということだったんだけど、やり方に歩どまりがあった。今の政権というのは、やり方に歩どまりがなくて、しかも率直に言うけれども、名字だけが今の沖縄の名字になっているんだけど、本当は仙台出身で、結婚して沖縄に長くいたんだけど、それは満州や朝鮮に幾ら長くいても、現地の言葉も覚えようとしないし、現地の習慣にもなじもうとしない植民者の発想、そういう人が沖縄担当大臣になっているとはどういうことだ。あるいは戦時中の支那通、中国語をよく知って、中国に人脈があったんだけど、汪兆銘工作とか繆斌工作とかやって、言うことを聞く間というのはいい支那人、かわいい支那人という扱いなんだけど、日本の統制がきかなくなった途端に侮蔑し、そして操作、工作の対象としか考えない。支那通、ロシア通というそういう専門家。それと同じ沖縄通ってたくさんいるわけです。こういうような眼差しというものをどうやって矯正させるか。これが沖縄に求められているテクニックなんですね。

ですから、日本全体と対立するということじゃなくて、日本全体が沖縄へのイメージを持つ情報の第一義的なものはメディアなんだから、そのメディアに情報を流しているのは政治エリートなんだから、その構図をどういうふうにしてわかりやすく解析して行って現実に影響を与えるかということを考えているんですけど、言論活動を通じてできる範囲でやっているんですけどね。持ち時間と暴力的な衝突、死者が発生する、間に合うか間に合わないかは率直に言ってわからない。

**東郷** 核心に迫ってきていますけれども、大城先生は沖縄からの視点で今の佐藤先生の、それから岩本先生や木谷先生は沖縄と京都の視点両方から見て、今の佐藤先生の総括はいかがですか。

**大城** 対立構造をつくってはいけないといいますが、今、国家権力と沖縄は対立構図になっているような気がしますけれども、必ずしも勝利するものの側に正義があるのではないと私は思います。圧倒的に権力の側が強い場合は、その権力の側に寄り添った形で真実や事実が隠蔽され、そして歪められていきます。そういう日本国家对沖縄の構図の対立の場合は、ぜひ何が真実なのか、何が改ざんされているのかということについては、辺野古問題も含めて留意をする必要があるのではないかなというふうな気がします。

本当に死者が出るのではないかということを佐藤さんが話されました。テロというと弱い者が強いものに対する手段や方策だと考えがちですが、沖縄では国家権力の側がテロまがいの行為をしているのではないかと。力づくで反対行動している市民を排除したり、あるいは海上で反対運動をしている人たちのボートを転覆させたり、その他もろもろ報道されているとおりですが、そういう強制的な排除、あるいは抗議に対しての対応については、私たちの国家、私たちの日本であるにもかかわらず、やはり懸念を抱かざるを得ないというのが沖縄の人たちの多くが抱いている感慨だろうと思います。

今、この時期というのは、沖縄において日本の国家権力の姿があらわになって見える時代という気がします。このようなことが長く続くと、これからの20年の学び、あるいは10年の学びというのは、先ほど独立論にも触れていましたけれども、そういうことを形づくる、心情的にそういうことに共感する人が多くなってくるのではないかと。そういうことを考えさせられる、そういう状況になっていくような気がします。

木谷 京都の視点からということですが、先ほどメディアを政治エリートが操作しているという話が佐藤先生からありましたように、やはりそういうところはあるのではないかと思います。と言いますのも、昨年、ほとんどきちんとした議論もなされないまま、京丹後市に米軍のXバンドレーダーが設置されました。京都府の方でも余りご存じないと思います。この間、立命館大学の先生が学生を連れて現地調査に行かれた際に事情聴取を受ける事件もありました。こういう事実もありますので、やはり基地問題というのは沖縄だけではなく、私たちも担っていかなければならない問題なのだと思います。その上で、どうしてこのような状況が日本で起きているのかということをもう一度考えなければいけないと思っています。

京都からの視点でもう1点言わせていただくと、将来を担っていく若い人たちが相互に交流することが今後より一層必要なのではないかと思います。そういう草の根の交流があって、沖縄のストーリーというのが京都で学ぶ学生にとってもパーソナルなストーリーになりますので、もっと学生たちを沖縄に連れていきたいと今回本当に思いました。沖縄から本土を見て、今までは「温度差がある」「距離感がある」というような印象を沖縄の方は本土の人間に抱かれていたと思いますが、最近は「無視されている」「軽視されている」との印象に変わりつつあるようで、ますます温度差ができてしまっています。そうなってはいけないと思っています。なので、若い人たちの交流というのが、今後もっと大事になってくるのではないかと思います。

東郷 岩本先生にお伺いする前に、ちょっと木谷先生にお伺いしたいんですけども、さきほどの先生のプレゼンで、日本人対沖縄人という対立構造を書かれて、それからトカゲのマークが出てきて、ハサミで尻尾を切るのはダメだ。そうではない真の対立構造というのは日本対アメリカだというのが次に出ましたですね。真の対立構造が日本対アメリカだということをもう一言だけ解説して、それに岩本先生の反論をお願いしたいと思います。

木谷 トカゲの尻尾というのは切ってもまた生えてくるものです。そういう感覚で、沖縄の人たちも何度も尻尾切りをやられてきました。たとえば、ブラジルから日系移民の人たちが日本に帰ってきて、工場で働かされて、不況で要らなくなったら政府が帰国支援金を支給してまたブラジルに帰らせる、そういう人たちの中にも沖縄にルーツを持つ人たちがいます。沖縄の人たちは常に差別的な構造の底辺にいるという状況です。そういう人たちを本土の人間がもう一度トカゲの尻尾切りをやるように、差別を受ける側にずっと置いておくというのはダメだと思います。しかし、最近いろんな本が出た影響で、沖縄対本土というような構造ができてしまうと、本土の人間として沖縄が抱えている問題を聞いた時に、あまりいい気がしないというのは佐藤先生がおっしゃられたとおりだと思います。そうではなくて、今、31の都道府県にアメリカの米軍施設があるように、これは日本の問題です。これはどういうことなのか、若い世代の私にとっては大きな疑問なのです。しかも、それを日本の税金で支払っている。許しがたいことだと思います。なので、この問題というのは、本土対沖縄ではなくて、やはりアメリカを向いていかなければいけない。日米地位協定についても考えなければいけないというのが私の意見です。

岩本 私は、以前、日米地位協定の論文も書いたこともあり、日米安保条約もちょっと勉強したこともあります。吉田茂が第2次世界大戦後に「軽武装・町人国家論」を主張しました。それは、敗戦後の日本が復興するために軍事に関して軽武装に限定し経済活動に注力する、日本の安全保障を主としてアメリカにお願いする、というものです。実際、日本はそれで経済発展してきました。経済発展した後は、こちらの方（日本）もお金持ちになったのだから「思いやり予算」で米軍を支援することになり、現在に至っているわけです。

私は、以前、防衛庁に所属していた関係（防衛庁防衛研究所に勤務）で、日米安全保障について色々と聞いたり見たり考えましたが、どうしても「日米同盟・命（最優先）」を主張して、米国ありきで安全保障を議論する人が庁内に数多くいました。むしろ、米国を安全保障の手段として考えるべきだというのが、私の立場です。米軍に駐留してもらう方が経費として安く上がるというふう考えるのか。米軍に日本や沖縄から撤退してもらいたいと考えるか。その場合には、米軍の代わりに、日本は自主防衛を強化するのか。本当に、日本は自主防衛できるのか。例えば、国内総生産（GDP）1%の防衛関連費を2%、3%、5%まで上げることができるのか。それだけの覚悟が日本にあるのか。日本国民が安全保障についてのそれらの問題を解決した上で、初めて、日米の安全保障条約を改定する、地位協定を改定するという議論をするのが、本来の筋だと思います。

現在、米軍基地を日本や沖縄から撤廃した方がいいという意見がありますが、じゃ、次の段階（米軍撤退後）の日本の安全保障についてどう考えているのですか。その議論がなければならぬと思います。単に米軍撤退とか経費節減という議論は、少し舌足らずになるのではないかと思います。全体的に日本の安全保障を考えて、米軍はその手段として考えるというのが、私の立場です。

**東郷** まだまだこれから続くのですが、30分たったところで、一回このセッションは締めさせていただきますと思います。皆さんありがとうございました。

**司会** 恐らく今、出ていました論点というのは、後ほどその質疑のところでもかなり拾えるものがあるかなと思いますので、そこでもまたお話をいただければと思います。

## 学生とのディスカッション

**司会** それでは、続きまして若い世代の意見、質問も聞いてみようということで、この後、学生代表6名、本学の学生ですが、入場しまして、そして質疑を交わしていくということになります。

それでは、学生の皆さん、それぞれ入場、登壇をお願いします。

このセッションの司会も引き続き東郷所長にやっていただきます。東郷先生、またバトンタッチいたしますので、よろしくお願いいたします。

**東郷** それでは、今、6名のうちの学生を紹介します。

一番向こうから、影井駿君であります。法学部法政策学科の4年生。

それから、次が大橋舞花さん。やはり法学部法政策学科の4年生です。

それから、田島理博君、法学部法政策学科の2年生です。

一番端が中岡大記君、法学研究科法政策学専攻博士課程に在籍しておりまして、この6名のチームリーダーとして過去3週間、皆さん一生懸命勉強してきました。

それから、その次が下條真太郎君で、この中で唯一経営学部から参加している2年生です。

それから最後、私の右が阿部文音さんで法学部法政策学科の4年生です。

以上、6名集まりました。

それでは、皆さん今日まで一生懸命勉強してきて、きょうは朝から基調講演とさっきのパネルディスカッションを聞いてきて、これからは皆さん5人と登壇者との一種のフリーディスカッションに入るわけです。皆さんから質問を受けて、それを適宜登壇者で答えていきたいということにしたいと思います。全体の持ち時間は30分しかないので、お1人には原則2分以内、最大限3分、しかもカードであと時間はないと出す余裕がないので、ちゃんと自己規制してするようにお願いします。

それでは、クラスの要領で、最初に発言したい人から手を挙げてください。

一遍に挙がってしまったので、一番向こうから、影井君、お願いします。

**影井** 改めまして影井と申します。よろしくお願いいたします。基調講演では貴重なお話、大変ありがとうございました。

佐藤先生にまずお聞きしたいのですが、基調講演のほうで“ビーカミング”ということで、アイデンティティをこれからつくっていくということを、また大城先生にあっては、アイデンティティが揺らいでいるという状況をお話いただいたかと思います。私、関西出身で兵庫県の北にある豊岡市というところに住んでいるのですが、ともすればアイデンティティというものは、わりかし関西人、また豊岡市民として、どちらかというと“日本人”というアイデンティティの上に重ねていくような重層的なものをイメージしがちだと思うんです。となると、これらの話を踏まえ沖縄ということ、複合ということを見ると、沖縄人と日本人を対峙させて、それを合わせたようなイメージで“複合”というものを捉えているかなと思うのですが、ここで大城先生が「アイデンティティが揺らいでいることに沖縄人の問題がある」というふうにおっしゃってまして、なるほどと思うんですね。僕たちの場合だと、自分たちのアイデンティティはなかなか揺らぎにくい。でも、そこが揺らいでしまうというところに複合アイデンティティの関心、趣旨があるのかなと思うのですが、質問としては、複合アイデンティティとなった場合、あるいはそれをつくっていった場合に、我々本土といいますか、日本人としてどういうふうに向き合っていけばいいのかというところをお聞かせいただけたらなと思いますので、よろしくお願いします。

東郷 佐藤先生、大城先生、よろしいですか。

佐藤 質問の趣旨が実はよくわからないんだけど回答を試みます。要するに複合アイデンティティというのは誰もが持っているんです。それだから、例えば紹介するときに、4年生とか3年生とかいう紹介があったでしょう。4回生とか3回生とか言わないでしょう。ということは、東郷さんというのはアカデミズムが相変わらず東京のスタンダードのアイデンティティで見ているわけですよ。何回生というのは関西においては一つの文化だから。そういう小さいところの差異というのがアイデンティティなわけです。

アーネスト・ゲルナーの『民族とナショナリズム』という本を読んでほしい。その中で耐エントロピーという話が出てくる。要するに鉄板の上を同じように熱しても、あるところだけ熱がたまっちゃう。こういうのがある種の問題の場合というのは、例えば肌の色というのが時に差別の原因になる。ところが、髪の毛の色というのはあんまりそのところで差別の民族的な原因になりにくいとか、いろんな例を挙げているんだけど、何が分節化されるかというのはその時代によって違う。1609年、薩摩が琉球に侵攻する。この前までは明と琉球の関係があるので薩摩の人たちも琉球に一種の畏敬の念を持っていたかもしれない。

人間のアイデンティティというのは変化するのだけれども、幾つかの複合するアイデンティティの中で、首尾一貫した筋を通さないといけないというのは近代の流行なんです。複数のアイデンティティをそのまま放置しておくということに近代人は耐えられないわけです。その耐えられないというのはいわば流行なんです。その中で出ている問題だから、それは沖縄の問題だけじゃなくて、あなた

方1人1人の中にもあると思う。

例えばあなたがあるとき、これは、こういうことがあってほしくないということなんだけれども、私は腎臓がよくないから、急速に腎機能が低下して、腎機能が10%程度になったら、もう透析になるのか、腎移植なのか、人生の持ち時間あとどれくらいなのかということになると、そしたら腎臓病を抱えている人のアイデンティティが出てくるわけですよ。複合アイデンティティというのはいろんなところであります。だから、沖縄だけが特殊な複合アイデンティティ、沖縄的な特色はあるんだけど、複合アイデンティティを沖縄人だけが持っているということじゃなくて、あなたも持っているから、そこは想像力であなたの抱えている問題を考えれば、複合アイデンティティというのは想像可能だと思うんです。

**東郷** まさに影井君の聞きたいことを答えてくださったと思うんですけども、大城先生、簡潔に一言。

**大城** 複合アイデンティティというか、流動的なアイデンティティは問題があるということですが、私は問題があるということじゃなくて、そこに特徴がある。それはとてもいいことだと評価をしているんです。流動的であるということとはまさに考えることをやめないということです。自分たちのアイデンティティについて考え続けること、それはポストモダンでいう、脱構築とかディ・コンストラクションとかいう概念に繋がるとは思います、今考え続けることの重要性が問われているように思います。ぜひ沖縄問題についても考え続けてもらいたい。沖縄の人たちも考え続けているわけです。それが大和、本土のほうに提案されたとき、本土はどう対応するかということです。そういう意味で、とてもエネルギーのあるアイデンティティだと思います。そういう状況を沖縄問題はつくり出していると思います。

**東郷** さっき大橋さんと田島君とほとんど同時に手を挙げましたが、レディーファーストで大橋さんをお願いします。

**大橋** ありがとうございます。大橋です。緊張しています。よろしくお願いします。お話ありがとうございました。

私がお聞きしたいのは、沖縄の人が本当に本土の人に不信感を持っているのかということです。私は今まで沖縄を日本の中の一部としてしか見たことがなくて、独立など、対立するような感じであまり見たことがありませんでした。今日、沖縄のことをよく理解しないといけないというお話を伺って、昔、修学旅行で沖縄に行ったこともあって、すごく明るくて陽気なイメージだったことを思い出しました。他方、沖縄の方が本土の方に不信感を持たれていることや、今、基地問題が起こっていることが、私のその当時のイメージと少し違っていて、実際に今住まれている一般市民の方は、本土の方に本当にそのような不信感を持たれているのかというモヤモヤした感じがあります。それをどう理解したらいいのかということについて沖縄出身の大城先生、お願いします。



**大城** 私の言ったことがちょっと誤解されていたら困るのですが、沖縄の人たちは本土の人たちに不信感を持っているわけではない。日本の国家のあり方、政治のあり方に不信感を持っているのです。この70年間の歴史、あるいは1609年の薩摩侵攻からの沖縄の歴史を考えると、国家の対応については琉球処分と称されるような不平等な出来事が何度も繰り返されているのではないかということ で不信感を拭えないということです。大和の人たち、個々の人々に対しては非常にフレンドリーに接していると思いますよ。

**東郷** 佐藤さん、何回かきょう話を聞いてきましたけれども、今の点についてどうですか。

**佐藤** それは日本とのアナロジーで考えるのじゃなくて、韓流ドラマとか韓流が好きなのはたくさんいるので、追っかけで多分、産大生でも韓国に行っている人がいると思う、バイトでお金をためて。それで行って韓国で嫌な感じは全然受けないでしょう。ところが、じゃ今度は同じ人が、鬱陵島に行き、独島記念館の視察をして、韓国がどういう形で竹島に対するキャンペーンを張っているのか調べに行くと言ったら、そういった目的では入管のところでまず入れてくれない。すごく嫌な韓国を見ろということで、どの切り口で相手と接触するかということだと思うんです。

だから、普段は全然けんかしようという気はないし、普通に楽しくやっている。だから、NHK 朝ドラマの「ちゅらさん」で描かれている沖縄の世界が一つあるでしょう。あともう一つは、千葉真一が主演している「沖縄やくざ戦争」という映画がある。あれはヤマトのやくざと沖縄のやくざとの間で大変な戦いになる。ここで見てくるところの沖縄はまた違うわけです。だから、ぜひ「沖縄のやくざ戦争」を見て、あれを見たら標準的な日本人ならば不快感を覚えると同時に、沖縄のある種の論理がよくわかるんです。だから、どの問題でどこで分節化してくるかということによって見え方が変わるので、誰がよくて誰が悪いという感じにはならないと思う。いい人もいれば悪い人もいる、それだけだと思います。

**東郷** ありがとうございます。田島君。

**田島** 田島です。少し緊張しております為、支離滅裂な内容になるかもしれませんが、宜しくお願い致します。

本日、お題が複合アイデンティティという事ですが、自分は生まれも育ちも東京で、京都産業大学に入学し、人生で初めて京都に住んだ為、ある意味では東京と京都、両方の性格を持っているのかなと思います。うどんは薄味が好きですが、お好み焼きをおかずにご飯食べるのは少し苦手ですし、エスカレーターは左に乗ってしまったり、自分を2回生ではなく、2年生と呼んだりするという点では、自分もまた複合アイデンティティを持っているのかなと思います、このお話を聞いておりました。

さて、質問の方に移らせて頂きます。現在、沖縄を巡る県内外及び日本内外、極東太平洋内外での様々な情勢により、沖縄のナショナリズムが高まっているのではないかと思います。先ほど岩本先生が申された通り、9月の国連で翁長雄志県知事が、ある意味で沖縄の方々にも民族自決権があるとも

言うべきような講演をしたことについて、沖縄県内ではさまざまな意見が生まれ、それが得てして全てが発言に対し反対というわけではなかったというのが一つ、それを物語っていると思います。どこかは思い出せないのですけれども、沖縄のある自治体では、市役所での挨拶を全て沖縄弁にしようといったような活動もあったと記憶しておりまして、そう言う意味では、沖縄固有の文化が復活しつつあり、ゆえに沖縄県内でナショナリズムが高まっているとも考えられ、ある意味での民族問題、独立運動の一つの火種となっているような気がしてなりません。そういう点で沖縄は、バルト3国でありますとか、チェチェン、エチオピア等の世界さまざまな場所における民族独立の火種の1つとも似ているような点があると思います。

こういったことが、先ほど冒頭で佐藤先生がおっしゃられたように、ナロードニスチ（Народность）とも言うべき亜民族が、ナロード（народ）、民族になろうとしている一つのきっかけと思いますが、では実際に本当にさまざまなきっかけが原因で沖縄が独立した場合、沖縄は今後どのようなことになっていくのでしょうか。また、バルト3国が独立したことが、ソ連崩壊の一つのきっかけとなっているという見方もできる為、沖縄が独立した日本というのはどのように道を歩んでいくのでしょうか。ご意見のほうをお伺いしたいなと思います。

東郷 佐藤先生、もしくはほかの方でもいいんですが、お願いします。

佐藤 まず翁長さんが主張していることは、これは明らかに民族自決権に基づいています。ただ、民族自決権を保有しているんだけれども、それは分離独立権みたいなものは行使しない、多分こういう論理の立て方だと思うんです。

じゃ独立は実際にできるかできないかということになったら、この独立をやるのに、何度も言っているように、それによって大統領になりたいと思う政治家が出てきて、国会議員になりたいという県会議員が出てきて、琉球大学が東京大学の地位を得たいと思うようになって、それで琉球新報、沖縄タイムスが朝日新聞と読売新聞の地位を得たいと思うようになったときに起きるんです。だから、あくまでも政治エリート、文化エリート、それから地場のエリートがエリートを交替させるという、その運動を私は非常に冷ややかに見ているわけです。沖縄が独立できるかといったらできますよ。それはどうしてかといったら、国連加盟国の中で40カ国ぐらい140万人以下の国があるし、それは全部島嶼国だから。

ただ、その場合の沖縄というのは、当然力学からして2つシナリオがある。1つは、次に沖縄大統領になって出てくる人がアメリカと取引をする。日米地位協定よりももっとアメリカに有利な琉米地位協定をつくりましょう。それだから私を終身大統領にしてくださいというような腐敗政治家が出てくるようになったら、よりアメリカべったりになる。あるいは日本があんまり沖縄は中国の手先だ云々だというと、自己成就する予言になって、日本に対する反発から中国に接近するかもしれない。ちなみに琉球処分の翌年に、1880年に分島増約案というのがあったから。分島増約案というのは何か

というと、日本政府が提案したので、宮古島と八重山、石垣とか、石垣に尖閣があるわけだから、これを全部中国にあげます。そのかわり中国に対する一方的最恵国待遇を適用するように日清修好条規を変えてくれ、こういうことで一回署名までしているんだけど、李鴻章が余りに不利だからということで批准しなかったわけです。日本国家が沖縄の一部、先島を中国に割譲するという意思を示したという事実があるから、それだから日本政府が尖閣がわが国固有の領土と言っても全然説得力がないわけです。こういうことを含めて、沖縄との関係においては歴史の分節点でどこに歴史の点と線を結ぶかということで、どんなことでも起き得る。

じゃそのときに日本との関係はどういうふうになるかといったら、これは非常に疎遠になる。そこで非常に嫌なのは、実はナショナリズムには領域的ナショナリズムと血統的ナショナリズムがあるんです。例えば尖閣に関して、尖閣基金を集めると15億円が集まる。これは領域に対する関心が強いわけです。日本は家制度がある中で、血統を重視するように見えるけれども、できの悪い息子が出てくると押し込めにして、養子をとるでしょう。沖縄は養子の伝統がちょっと違うんです。養子をとっても家督を継げないのです。ということは、裏返したら血統的ナショナリズムが強い。ということは、私の場合は血筋は半分沖縄なんだけれども、アイデンティティが沖縄と日本の間でぶつかるとう沖縄になる。私の周囲で半分沖縄のルーツがある人はたいていそうで、4分の1の血族の人まではほぼ大体が沖縄にルーツがあるという自己意識になる、となるというのが私の感触です。沖縄が独立になったとき、沖縄本国の140万人だけじゃなくて、日本の中にいる沖縄系は恐らく数百万人いる。その人たちとの関係において、在日韓国人を超える数の少数派というのを日本国内にすることが顕在化されて、これが大変な社会の緊張の原因になり得るわけです。

東郷    ありがとうございます。それではこちら側から下條君。

下條    経営学部経営学科2年の下條真太郎といいます。全く専門外の分野ですので、非常に的外れな質問をしてしまうかもしれませんが、すみません。

佐藤優さんに質問なのですが、佐藤優さんは先ほど沖縄というものの周りには日本あるいは米国という帝国というものがあるという言葉を使っておられました。佐藤さんは著書の中で、帝国と帝国主義は違うのだというような解釈を行われておられました。帝国には理念があって、帝国主義にはその理念が失われていて、ヘゲモニー的な状態に陥っているという言葉その本の中で目にしました。では、その帝国というものが持っている理念というのが、日本と沖縄を統合する理念なのかなというふうに僕は思いました。佐藤さんにとって、そのあるべき理念としてどういったものが考えられると思いますか。ちょっと的外れかもしれませんが、この質問にお答えをいただければありがたいと思います。

東郷    時間がせつていますので、阿部さん、続いてどうぞ。

阿部    法学部法政策学科4回生の阿部文音と申します。よろしくお願いします。

質問の結論から申し上げますと、沖縄人が言う同胞というのは一体何でしょうか。我々が少数派や、すなわち日本で言う沖縄人と、私たちの意識の差を埋める術というのは何かあるのだろうか。そもそもそれができるのだろうか、というところをまずお聞きたいです。

その質問に至った経緯なのですが、本日この質問をさせていただく場をいただきまして、勉強させていただきました。その中で沖縄人は日本人に同胞として認められているように余り感じられていないということを知りました。一方で、先日とあるテレビ番組を見て、『昭和天皇が亡くなったときに、本土の新聞では「天皇崩御」と報道されていたのに対して、琉球新聞では「天皇ご逝去」と報道されていた』ということを知りました。「崩御」という言葉とこの「ご逝去」という言葉の違いというのは、外国語で訳すと同じになるけれども、日本語からしたらすごく大きな差があります。何故ご逝去という言葉を使ったのか、と考えたのです。それは私自身が本土の人間であって、沖縄の方からすると何か意図があったのかもしれない、その気持ちをどう理解すればいいのか、その差を埋めるにはどうすればいいのかという部分を疑問に持ちました。その点に関してお伺いしたいと思います。

**東郷** 違う質問が2つ出て申しわけないのですが、佐藤さんからお願いします。

**佐藤** 後者のほうは、新聞というのはその読者の最大公約数が受け入れられるワーディングを使うから、それ以上でもそれ以下でもないという話だと思います。

前者の質問は、ちょっと趣旨がよくわからなかったんですが、どういう趣旨ですか。

**東郷** 沖縄の周りに3つの大きな国がある、独立になった場合、アメリカ、中国、日本、それぞれが持つ帝国としての理念は何か。

**佐藤** だから帝国と帝国主義の違い、これは柄谷行人さんなんか言っていることです。帝国としての共通している何かというのは何かということ。それはXなんです。それを名称にした途端離れていってしまう。それを保守派の人は天皇とか皇統とか、そういったことで言いたがるのだけれども、それを言った途端に疎外されて、別のものになってしまう。それはXなの。Xなるものがある限り、日本と沖縄は一緒にやっていけるということだと思えます。それで明らかにこれは違う文化であるということで、異質なものが日本の中に入っているという。例えば選挙に行ったらわかるわけ。公職選挙法で街宣車1台しか動かせないはずですが。沖縄は各候補3台ぐらい街宣車を動かしている。それなのに公職選挙法違反で捕まったなんて話は聞いたことないです。そういったことでローカルルールがいろいろあるわけです。それが認められているというのは、事実上の帝国だということなんです。その帝国があるということはいいいことなんです。大日本帝国がまだ生き残っている、沖縄という外部領域があるから。それだから、大日本帝国が生き残っているから、アイヌを先住民だと認知することができるわけです。

この帝国というのは21世紀に生き残っていくためにはすごく私はいいい装置であるわけで、大日本帝国の中の肯定的な遺産というのが少し形を変えて生き残っているわけで、となると、それは制度的

に整理し直すと連邦制なんていうのは非常にいい制度じゃないかなと僕は思っているんです。

**東郷** 逆に言うと、アメリカ、それから中国との間で沖縄はXというものを持つ可能性というのは非常に少ないということですか。

**佐藤** アメリカとの関係においては、人権という普遍的な価値においてはある。金門会とか、だから、大田昌秀さんに関しても、アメリカに対しては日本兵よりもアメリカ兵のほうが我々を助けてくれたんだよという思いを持っている。人権、特にアメリカは教育を重視したのですよ。戦前、日本で高等教育機関がなかったのは沖縄県だけだからね。沖縄高等師範学校が1943年になってからようやく専門学校になったんだけど、実質的な高等教育は行われなかった。要するに台北にも京城にも帝大があるのに、沖縄には高校すらない。一種の愚民政策ですよ。それに対してアメリカは教育を、ミシガン州立大学からチームを持ってきて琉球大学をつくる。この琉球大学というのは、今でもそうだけど、沖縄のエリートを再生産していくし、県庁でも琉球大学出身者が圧倒的な人材を誇っている。そういうことをしたということで共通の価値観がある。ところが、アメリカ人というのは裁判とか、さっきのレイプの例なんかでどういうことをしたかということも沖縄人はよく知っているわけです。それだから、司法とか人権ということになるとダブルスタンダードで、特に非エリートのアメリカ人でひどいのがいるということを沖縄人は皮膚感覚でわかっている。それは特に女性に対する暴力という形であらわれてくる。それを守れないということの悔しさなんですね。

中国に関しては実は遠い。よくわからない、一緒に暮らしたことないから。

**東郷** 最後に中岡君。

**中岡** 余り時間もないので、簡潔に質問させていただきます。3人の先生にお答えいただきたいのですけれども、アイデンティティとは何でしょうか。お願いします。

**佐藤** あなたにとってのアイデンティティで一番重要なのは何。

**中岡** 少し質問の意図を説明させていただきますと、私はよく海外に留学することがあるのですが、そのときに初めてやはり自分は日本人だなというふうに感じるというか、他者を介してでしか自分というものを自覚することができなくて、自分を自分で積極的に定義することがなかなか難しいというところがあるんです。そういった他者との中でしか自分を定義できないところを超えて、より積極的に自分のルーツみたいなものを見つけることができれば、それがもしかしたらアイデンティティなのかなとも思います。

**佐藤** もっと平たいところで、例えば産大生のアイデンティティってあなたはどれくらい強い。

**中岡** それは私はアイデンティティとは思わないです。それは属性であって、アイデンティティとは思いません。例えば先ほども男性・女性ということもおっしゃられていましたけれども、それは私にとってはどちらかというと属性なんです。アイデンティティとはちょっと。

**佐藤** 属性とアイデンティティが違うということですね。僕の場合は、例えば同志社大学の神学部



で学んだというのは強力なアイデンティティになっています。だから、どんなできの悪い子でも神学部の後輩だったらかわいくてしょうがない。それは理屈の外です。だから、アイデンティティというのは、そういった意味で合理的に説明できないところになってくる。だから、沖縄が好きなのと同じくらい僕は同志社の神学部が好きなのわけ。ただ、今、同志社の神学部出身であるがゆえにひどい目に遭わされるということは余りないからね。昔はキリシタン邪宗門の延長線上で、戦時中はスパイの学校だという扱いになったわけだから、神学部というアイデンティティを強烈に持っていた私の恩師の先生方は、いつも飲み食いは全部ただでさせてくれた。先輩は後輩におごるのが当たり前だということで。だからアイデンティティというのはそういったことで、自分の居心地のいいところから生まれてくるのだと思います。私にとっては沖縄も同志社の神学部も居心地がいい。外務省は居心地がいい面と悪い面が両方あった。

**東郷** ありがとうございます。あとの2人の先生にもお伺いしたいんですけども、ちょうど時間になりましたので、これで学生との討論を終わらせていただきます。どうもご清聴ありがとうございます。

**司会** 学生の皆さん、ご苦勞様でした。お答えいただきましたパネリストの先生方、ありがとうございました。

## 会場とのディスカッション

**司会** それでは、時間を置かずにこのまま最後の会場との質疑ということになるのですが、もちろんわらわらとやっていたら大変なことになりますので、先ほどいただきました質問票をもとにして、私のほうでそれを幾つかにまとめて投げかけるというふうにしたいと思います。質問はたくさんいただきまして、本当にありがとうございました。お手元のほうでこんなにたくさん集まっています、これを分類していきますと幾つかの傾向があることもわかりましたので、どなたかのご質問をもとにして、ベースにして投げかけていきますけれども、割合に多かった質問というものを少しミックスした形で投げけるということにもなろうかと思っています。

それでは、早速なんですけれども、今、一番最後の学生質問でもアイデンティティのものが出ていましたし、これはやはり今回のテーマでも大きなところですので、まずこの質問から始めてみたいと思っています。佐藤先生の基調講演の話を聞くと発音が心配になるんですが、ウチナーンチュということなんですけれども、その方のほうが違いを認めた上での社会的包摂力が高いように考えるんだけれども、そういう切り口から、同一性を尊ぶ日本に対して沖縄が果たす役割の重要性があるのでは



ないでしょうか。どういうところでそれを発揮すればいいのか、あるいはこの理解が正しいのかというご質問かと思います。その複合アイデンティティは沖縄だけでなくほかにもあるんでしょうけれども、お話全体を聞いた上での感想として、そのアイデンティティに基づいて社会的包摂力が沖縄の方にあるように思います。それが同一性の高い日本に対して何か果たす役割があるんでしょうかというご質問です。この点はいかがでしょうかということ、まず佐藤先生、そして木谷先生にも質問マークがついていますので、お2人の先生にお願いしたいと思います。

佐藤 非常に的確に私の考えていることを捉えていただいていると思います。ぜひこの質問をされた方に読んでほしい小説があります。大城立裕先生の『小説琉球処分』という小説です。その中で、琉球処分官の松田道之について、こんなふうに描かれています。松田道之は悪いやつじゃなくて、沖縄の近代化のために明治国家への統合を進めていく、良心的でいろいろ悩む、それで沖縄にどうやって受け入れられようかと一生懸命考えている官僚として描かれています。実際の記録を見ても、そういう人だったようだ。ところが、最後に力を行使しないといけなくなったときに、琉球政府の人たちは、お願いだから王様を東京に連れていくのを待ってくださいと訴える。松田が、もうこれ以上待てないと言ったら、みんなわあんと泣き出すわけです。ところが、よく見てみると誰も涙を出してないし、それでちょっと薄ら笑いを浮かべているのがいる。これは中国の葬式のときの泣き方なんですよ。そんな葬式の泣きまねまでしている。でも、その瞬間松田は思うわけです。追っても追っても幾らでもやってくる蛾のような感じだ。この人たちを相手にしていると勝っているのか負けているのかわからなくなると。それで琉球処分の最後のところで、明治政府は琉球政府の役人にちゃんとポストを保障するんだと言ったんだけど、戸籍係のようなつまらない仕事しか与えない。琉球政府の役人で中国に助けを頼んで逃げていった脱清人も中国は助けてくれない。その中で焦燥して内紛が起きて、恐らく自分の友だちは殺されたんじゃないか。こういう情報が入ってくる中で、しょせん歴史を変えることはできないのだというんだけど、そう言い切ってはいけないのだ。こんなつまらない仕事をしても、そう言い切ったらいけないというところで終わる。沖縄というのは、その意味では韓国のようなハンの文化、恨みの文化にはならない。しかし、蛾のようなしぶとさ、しつこさがある。この追っても追ってもやって来る。

私もアイデンティティが強力になったというのは母親が死んだときですよ。母親が死ぬ直前のところに来て、お前いろいろあるんだけど、今、沖縄とヤマトはこれからたいへんになるから、お前は両方の血が入っているから、両方が仲よくするようにするんだぞ、わかったな。これは母の最期に言ったことだから。母親の言いつけは守らないといけない。そういうふうになると、やはりいろいろそこから沖縄について勉強もし始めてくるわけです。そうすると、家庭の中で教えられてきた歴史であるとか、母の歴史であるとか、伯父の物語であるとか、そういったことが今まで外務省にいますというのとはどこか心の中に封印されていたんだけど、そのきっかけにぎゅっと出てくるわけなん

です。それと沖縄の情勢の動きがシンクロしているから、こういう感じなんですよ。

だから、アイデンティティというのは個人の物語と歴史状況と両方が合わさったときに出てくる。それから、あと作家というのは表現するのが仕事だから、その問題が先鋭に出てくるといことはあるでしょうね。

司会 ありがとうございます。木谷先生のほうはいかがでしょう。

木谷 沖縄でいろんな大学を見て回ったのですが、名桜大学のある先生が授業で沖縄人の心についてお話しさせていました。沖縄の学生さんは、今、ほとんどの方がウチナーグチと呼ばれる沖縄の言葉を話すことができなくなっているそうです。見学させていた授業で「ウチナーグチがわかる人は手を挙げて」と先生がおっしゃったところ、誰も手を挙げませんでした。ちなみにそれは名桜大学の「沖縄学」という授業でした。また先生が「皆さんは自分のことを日本人と思っていますか」と聞くと、パラパラと手が挙がりました。つぎに「皆さんは自分のことを沖縄人だと思っていますか」と先生が聞かれると、半分くらいの学生が手を挙げました。最後に先生が「皆さんはウチナーですか」と聞いたら、全員が一斉に手を挙げました。学生の皆さんはいろんなアイデンティティを持っているようですが、自分たちがウチナーンチュであるということを共通で認識しているみたいでした。

無理に日本を押しつける必要はありませんし、日本が多民族国家であることを認める、あるいは多民族国家として生きる道を探していくのも良いのではないかと思います。アメリカはよく多民族国家だと言われますが、その多民族国家を統合するためには共通のビジョンが必要です。アメリカの場合は1ドル札にも書かれているように、In God We Trust をモットーとしています。1ドル札に神が出てきます。この God というのは、キリスト教の神だけではなくユダヤ教も含まれています。そういうユダヤ・キリスト教的な価値観で以ってアメリカは一つになろうとしています。

それでは、アイヌの人たちもいる、沖縄の人たちもいる、在日コリアンの人たちもいる、中国から来られた人たちもいる、そういう多民族国家として日本が存続していくためにも、共通のビジョンが必要です。たとえばそのビジョンの一つとして、日本は戦争をしない国である、我々は戦争をしない国の国民である、という共通のアイデンティティを持って未来に進むことができれば良いのではないかと思います。

以上です。

司会 ありがとうございます。

続いての質問ですけれども、これは大変に全体的に多かった質問でして、やはり辺野古の問題等にかかわるようなご質問でした。あるいは米軍基地全体にかかわるようなご質問でした。まず2つの質問を同時に投げかけるようにいたします、別々の方面から来ているものですから。

まず1つ目の質問は、これは木谷先生に来ていたものなんですけれども、米軍基地があることが悪いという前提があったように見受けられるんだけど、辺野古移設にしても、京丹後のXバンド

レーダーにしても、そこにはやはり国際的な背景というものがあるのではないか。こうしたことはどのようにお考えでしょうかということです。

もう一つは、佐藤先生、そして岩本先生にご質問という形で来ていますが、そのほかの質問も合わせますと東郷先生にもお聞きしたほうがいいかと思います。お三方にお願いします。シンプルに言いますと、日本の米軍基地全体を減らすのが何だかんだといって一番なのじゃないでしょうかというご質問です。その実現の可能性なり、あるいはその考え方の是非なり、このことをお答えいただければと思います。

まず、木谷先生からいかがでしょうか。

木谷 「米軍基地があることが悪いという前提があったように見受けられる」ということですが、私は明確に米軍基地が日本にあってはいけないと思っています。国際的な関係や背景があっても米軍基地が日本にあっては良いのではないかという点については、それなら京都御所の隣にあっては良いのではないか、ということが言えます。原発だってそうです。私たちの隣にあったら嫌だと思ってしまう一部の人たちに押し付けるとするのは、これは明確な差別です。日米安保を考慮に入れて、アメリカとの関係が大事だというのであれば、東京の皇居の横に米軍基地を建てても良いはずで、京都御所の横に建てても良いはずで、それで、もしアメリカ軍のヘリが京都御所に落ちたとき、アメリカ兵が「アウトアウト!」「出ていけ!」と言ってテープを引いて皆さんを御所から追い出しても良いのでしょうか。そうはならないと思います。ですので、そういう想像力を持って、自分たちが嫌なことは沖縄にも押しつけない、という考えが私は大事だと思います。また、辺野古の問題ですが、普天間を移設しても専用施設面積の全国に占める割合は0.7%しか減らないのです。しかも以前の計画では、辺野古に移設して15年後には日本のものになるということになっていたのですが、今は200年の耐用年数があります。永久的にアメリカ軍がそこにいることになりますので、それはいけない。しかも、なぜ日本の税金を使って辺野古移設をしなければならないのでしょうか。国際的な背景があっても辺野古移設は絶対にダメだと思っています。

司会 というお答えなんですけれども、今のことも、もしよろしければ反論も含めてお話しになったらいかがと思いますけれども、もう一度繰り返します。日本の米軍基地全体をむしろ減らしていくということが沖縄の基地負担を軽くしつつ、この問題を全体に解決するには一番いい方法じゃないかという質問が来ているんですね。これに関して岩本先生、佐藤先生、そして東郷先生、お答えいただければと思います。この順番で岩本先生、いかがでしょうか。

岩本 私からですか。誰も自国領域内に外国軍隊が駐留することをよしとしないわけですが、しかし、第二次世界大戦以降、冷戦構造・東西対立があって、そのために北大西洋条約機構（NATO）が成立し、対抗してワルシャワ条約機構（WTO）が結成され、日米・日韓安保条約も締結されました。安全保障条約に基づく外国軍駐留はやはり必要悪であるということで、我々はそれを飲み込んできたわ

けです。それは、先ほど申しましたように、吉田茂の「軽武装・町人国家論」に基づいてのことです。ある一時期、冷戦構造の中で日本を非武装中立にすべきであるという議論もありましたが、それは国際安全保障状況からしてなかなか難しかった。もし米軍が日本に駐留していなかったらどうなっているのかというのは、それは仮定の問題ですから、よくわかりません。

ただ、駐留外国軍を減らすことは、理想主義から見るのか、現実主義から見るのか、によって意見が異なります。理想主義からすれば、駐留外国軍を減らすべきであるし、外国軍隊がいなくなる方がいいに決まっています。しかし、その理想と国際安全保障の現実との調和点をどこに探すかということが重要です。駐留外国軍を減らした場合に、日本はその穴埋めとして自衛隊を今まで以上の軍隊に増強させるのか、日本国民はその覚悟があるのか。そういう意味では、様々な安全保障の要素を勘案しながら、今の段階にきています。それがベストとは思わないのですが、落ち着くところに今、落ち着いてきています。一生懸命、在日米軍基地の基地負担や思いやり予算を減らそうと日本政府は努力しています。しかしながら、アメリカは在日米軍の経費負担の増額を要求しています。そこで、日米両国が折り合って前例踏襲の形で「在日米軍駐留経費負担特別協定」を締結しているわけです。

私も、在日米軍の現状のままでいいとは思っていません。硬直化した冷戦が終結して21世紀の国際社会が流動化してハッピーになるかなと思っていたら、2001年に9.11同時多発テロ事件が起こった。世界は、国際テロ時代に入ってきました。いつかは、日本も国際テロの深刻な影響を受けるだろうと思います。そういった国際情勢の中で、日本国民全体が自国の安全保障について現実的に議論すべきであるというのが、私のスタンスです。どこの立場がいいかというのは、ここでは差し控えていただきたいと思います。

司会 それでは、佐藤先生、いかがでしょうか。

佐藤 私は人権問題だとか国内政治に関しては、どちらかというと日本の標準よりはハト派だと思います。ところが、安全保障政策に関しては日本の標準的なところからいうとかなりタカ派なんです。それはどうしてかという、外務省にいたということだけではなくて、ソ連という国を相手にして、その後もロシアを相手にしているから、だからどうしてもこれは私の限界なんだけれども、現下国際的な緊張プラス、アメリカの外交政策全体を考慮したところにおいて、日米同盟というのは必要不可欠だと思う。しかもむしろ強化していく必要があると思います。例えば電子的な分野においても、日本は準天頂図衛星をちゃんと打ち上げて、衛星でももっと情報を日本で独自に取れるようにしてアメリカとやりとりする。それから潜水艦にしても、オーストラリアとの関係を強化するために、そうりゅう級の潜水艦を輸出するということは、むしろ安倍政権のアベノミクスの成長戦略の中心に据えてほしいと思う。それぐらいのところにおいて国防力を強化する必要があると思う。ただし、沖縄の基地というのは民主的な手続を一切経てないんです。原発とは違うんです。原発が設置されている道県の首長、議会、それから設置する自治体の首長、議会、隣接自治体の議会、首長の全部の了解を

とっているわけです、民主的な手続を経て。沖縄の基地というのはそうではなくて、戦時中に住民が強制移住させられているときに、住民が難民化させられているときに接收されたのはハーグ陸戦法規違反なんですよ。その後、基地も銃剣とブルドーザーで拡大されてきた、そういう経緯があるわけ。それなんだけれども、今の状況の中においてこれをすぐに動かすということはできない。これは現実的にできない。そこは私はそう考えます。

沖縄の基地というのはすごく脆弱なんです。どうしてかというと、水は全部民間水道に頼っているんだから。嘉手納にしたって、普天間にしたって、水道さえとめてしまえば、兵器を全部洗えなくなるから。ということは、水道をとめようと思えばできるんだけれども、そのライフラインはずっと沖縄はとめていない。その意味においては、不当な形でつくられた基地なんだけれども、基地機能が麻痺するようなことはせずに沖縄は最大限協力している。自分たちが弱い立場だからということだけじゃなくて、安全保障上、沖縄が果たす役割があるという説明に対して一定のところはやはり沖縄のエリートは納得している。これが実態です。ただ、明示的には言わない。あくまでもそれは不当につくられた基地だから反対だという建前を崩さない。

辺野古について、そもそも名護への移設を決めたのは鈴木宗男さんだった。以前からさとうきび価格の交渉で鈴木さんは沖縄側に立って努力していた。その絡みで比嘉鉄也（元名護市長）との関係もできた。それから、鈴木宗男さんは県道 104 号線沿いの実弾演習を唯一矢臼別に引き受けたんだから。そういう鈴木さんの対応を見る中において、比嘉鉄也が自分が辞めるかわりに名護市に引き受けましようと言った。そのときはキャンプシュワブの中の滑走路を 500 メートル延長して、軍民共用空港にした上で 10 年で返還する、こういう約束で名護への移設に合意したわけです。基地の中の移設だから、これは日米安保条約上、沖縄県の許認可権も及ばないわけです。こういう案で沖縄も折れて、とりあえずの折り合いは稲嶺県政のときにつきそうになった。ところが、鈴木さんが逮捕された後、いつの間にか沖合いに出て、2 本滑走路をつくって埋め立てをする。辺野古の海を埋めるというのは、その後出てきた話なんです。これは率直に言って砂利利権ですよ。だからもう汚くて汚くてしょうがない話です。これは日本の特定の政治家の利権構造と結びついているし、土建屋と結びついているわけ。それに結びついている沖縄の土建屋もあるけどね。しかし、孫請、曾孫請で微々たるものです。だから、安全保障上の問題とは全然違うわけです。

じゃ普天間の話でどうやるのか。これに関しては、翁長さんは、オスプレイ出ていけと言っている。でも考えてみてください、台湾海峡有事のために普天間の海兵隊が駐留しているのだったら、何で揚陸艦が佐世保にあるのですか。台湾海峡有事なんかには備えてないじゃないですか。あるいは普天間にいるのは 3 カ月だよ。どこで訓練しているの。モンゴルかオーストラリア、砂漠で訓練している。これは台湾海峡でも、朝鮮半島でもないですよ。明らかに中東やアフガニスタンでの展開を想定して訓練をしているわけですよ。沖縄にいてるのは、沖縄でリラックスできるし、思いやり予算でお金が出る



からでしょう。ということでは、抑止という観点からして、まず抑止力に海兵隊を使うということも、これも専門家の議論からすればどういう議論なのという話になってきますから、それを考えた場合には、海兵隊は外に出て、それを与件として日本の安全保障体制を保つことができる。

それで抑止力が足りなくなるならば、じゃあ、沖縄で強大な県防衛隊をつくる。そのところで沖縄県の枠の中で予算をちゃんとつけてもらって、沖縄県にしか赴任しない。最新の兵器の使い方を教える。それで台風があったとき、サトウキビの刈り取りを手伝う。こういう沖縄県の自衛官をつくる。こういうような形で沖縄の保守だったら、この先、提案が出てくるかもしれない。しかし、そのときに中央政府はのめますかということです。仮にそのときに7万人ぐらいそういう人たちが出てきたら、それは状況によってはどこに武器が向かってくるかわからない。

非武装中立論の関連でも一言指摘しておきたい。山川均の中立非武装中立論についてです。社会党の非武装中立論は山川が中心になってつくられました。『世界』にも論文が出ている。読んでほしいんです。何で非武装中立を言ったか。武装した自衛隊があると、レーニンが軍隊から革命をやったでしょう。日本軍が新たにできると、それによってソ連が介入してきて共産革命をやる危険性があるから、非武装中立じゃないといけないというのが社会党の非武装中立論の原点です。ですから、非武装中立論についてもずれてきているわけ。沖縄が今のところ、自分たちで自衛隊を増強させろなんていうことは絶対に言わないと思っているんだけれども、沖縄の県の中だけで配置するということだったら、住民虐殺とかそういったこととは関係ない、地域振興になるとなった場合に、じゃ東京はそれを認められますかということになると思います。

そういうところが沖縄のアイデンティティとか独立の問題と安全保障と密接に絡んでいるんです。だから、沖縄が日本とやっていけるという信頼関係を維持しないといけないんだけれども、それが今、すごく危くなっている。現実的には辺野古を直ちにやめる。直ちにやめられないのだったら、工事のモラトリアムとして、別途合意するまで当面の間、工事はとめる。それで沖縄側のほうは譲歩するものはどうしたかという、その別途合意するまでの当面の間においては国際展開とかをやらない。国連演説とか国際化をしない、そのところで合意をして、モラトリアム期間を合意するまで当面の間、設けるとか、やる気になれば知恵は出てくるはずなんです。と僕は見ているんですけどもね。

**東郷** 男が3人続いてしまって、比較的同じような意見で申しわけないのですけども、木谷先生から御所の横に米軍基地をつくるか、あるいは私は東京ですけども、皇居の横に基地をつくるかという問題が出されました。これは米軍基地ではなくて、自衛隊の基地を置くかという問題でもありますね。私もあると思います。私は静岡県の川勝平太知事のアドバイザーをしているんですけども、富士山が大問題なんですね。世界遺産になった。何でなったか。信仰と美。信仰と美と基地の共存は一見あり得ないように思われます。では、富士山の横に基地があるではないか、どうするんだ。確かに問題はあるんですね。けれど、この問題は日本人がみんなで考えて、つまりこの小さな国土の中で



いろんなことをしなくてははいけないんです。日本人には大切にしなければいけないものがある。一つは、日本の自然、その自然の中で育ってきた伝統、これは私の意見では日本の一番いいものです。それをみんなで大事にしなくてははいけない。その大事にしようとした重点地域というか、ある種の地域に基地はなじまないんですね。しかし他方、今の国際政治の現実、今、佐藤さんも言った、私も全くそう思うんですけれども、この状況の中で日本が何の武装もしない、自衛隊もない、それから米軍基地もない。この状況で私は国際的に生き残れると思いません。そうすると、どこかにつくらなくてははいけない。どこにつくるかということはやっぱりみんなで話をして、工場をどこにつくるか、基地をどこにつくるかということはみんなで考えて、要するにそこでコンセンサスがあるような場所につくっていくしかないと思うんですね。それは私たちの責任、日本人の責任だと思うんです。それが大きなピクチャー。

さて、沖縄との問題においてはずっと出ている沖縄という小さな国土の0.6%の上に75%、この圧倒的な不均衡の問題があるんですね。この不均衡を解消しなくてははいけない。岩本先生初めとしてみんなそう思っていると思うんです。それには本土の中にもっと米軍の基地を移すことです。そうすると、そこでわっといろんな議論が出てきて、それは本当に私も解決の一つの重要な方向だと思うんです。辺野古の話というのは、今、佐藤さんが最後に突っ込んで話してくれましたけれども、まさに本当に土建の利権。ところが、土建の利権となったときに、日本国全部で土建の利権が動いているわけです。特にオリンピックを狙って東京の周りは土建の利権ばかりが動いている。恐ろしい状況があるその文脈で考えなくてははいけない部分があると思うんですね。だから、そういう文脈も含めて考えて、やっぱり減らすべきものは減らすという方向で考え得るかなというのを、今、佐藤さんの話を聞いていて思いました。

佐藤 とにかくあんまり大きいことじゃなくて、辺野古は緊急の問題だから、とにかくあれだけやめるところから話し合っていく。あれを強行するということになったら抑止力だって弱まりますよ。沖縄の米軍基地は全て住民の敵意に囲まれる、そんな基地は抑止力を保てない。でも、それはアメリカは気づき始めているんですよ。本当にやれるのというのは、今、アメリカから来ているメッセージですよ。安倍政権はやれると言っているけども。やれませんかと言ったら次善策を考えるわけだから、全然問題ないんです。特にトランプが大統領になったときにチャンスがあります。トランプはそんな沖縄がブーブー言っているんだったら要らねえ。トランプは孤立主義だから沖縄から米軍を引き上げる可能性があります。もしかしたら平和のためにはトランプ大統領の出現がすごくいいのかもしれない。プーチンがトランプをほめているのは、米国がトランプが孤立主義になることによって、ロシアが中東でやりたいようにできる。だからぜひトランプさんになってほしいし、これはなかなかの人物だとか言って、人の悪口を言うのしか仕事じゃないようなプーチンがほめているということは、これは相当アメリカの国益にマイナスになる大統領で間違いないです。でも、辺野古の問題はトラン

プになったら一瞬のうちに解決すると思います。

司会 ありがとうございます。ジョークのようで非常に納得するお話ですね、今のところは。

時間が迫ってきていますので、そして考えて用意していました質問に辺野古のこともあったんですが、かなりお答えいただいていたと思います。政治的には沖縄問題は結局行き詰まっちゃっているんでしょうかというご質問をいただいたんですが、これも今のお話の中でかなり解消されていますので、一番最後の総括のところで、もしよろしければまたお話しいただければと思います。

最後の質問というのは、我々世界問題研にとってとてもすごく実は気になる質問が1つありまして、これは大城先生、そして佐藤先生、ルーツを沖縄に持っていらっしゃる先生方へのご質問になるんですが、若泉敬2代目所長のことです。沖縄の祖国復帰に若泉先生は尽力されたことになりまし、その経緯は冒頭の挨拶で東郷所長がご説明されたとおりです。この若泉先生の実績に対して、沖縄の方々はどういうふうな評価をされているのか。いろんな意見はあり得ると思いますけれども、そのあたりの感触のことを教えていただければと思います。大城先生からいかがでしょうか。

大城 ありがとうございます。沖縄が戦後日本国から切り離されて米軍占領下にあったときに、沖縄は独立を選ぶんじゃなくて復帰を選びました。復帰については反復帰も含めてさまざまな意見がありました。そのとき独立するチャンスもあったのではないかという意見もあります。ただ、その復帰前後のリーダーに屋良朝苗という人がいまして、前後8年間教育者であり、政治家であり、沖縄のリーダーでありました。屋良先生は、さまざまな問題はあるけれども、沖縄の側に寄り添って課題を解決していく。どんな困難なときでも一条の光を忘れずに前進しよう。ウチナーの心を忘れてはいけないということで、私たち県民を叱咤激励しました。民主国家であると思った日本へ復帰していくわけですが、そのような思いが裏切られていくということに、ある意味沖縄の人たちの不満とか、あるいは苦悩とかというのがあるわけです。先ほど若泉先生の話を読しましたが、まず目の前の解決できること、屋良先生は沖縄の人たちに寄り添いましたけれども、大和政府の人たちをもある意味人間として信頼した。その人間的な関係をも大切にしながら、困難な時代を乗り越えていく。そのことが一番の根本的なところ、重要なことじゃないかなと思います。人間を信頼し、希望をあきらめない。そしてできることからやっていく。そういう意味では、先ほど話をした若泉先生にとっても、沖縄の問題についてはいろいろとさまざまな課題はあるけれども、自分の信念を貫いていった、考えていったということで、私にとっては屋良先生も若泉先生も時代の困難さと誠実に向き合った偉大な先輩の1人だと思っています。

司会 ありがとうございます。佐藤先生、いかがでしょうか。

佐藤 屋良朝苗知事に関しては、戦前においては大成翼賛会の非常に重要な活動家ですね。それから終始一貫しているのは尊皇家であった。天皇陛下、皇室に対する畏敬の念は非常に強かった。そのところというのはやはり若泉さんもわかっていたし、あるいは若泉さんと同じような役割を果た

した陸軍中野学校の出身の末次一郎さんもわかっていたでしょうね。

若泉さんに関しては、私は若泉さんに関してそんなに一生懸命調べたことはないし、リアルなところでの若泉さんというのは自分の中のリアリティとしてわいてこないんだけど、私が非常に尊敬する2人の人が正反対の評価をしています。若泉さんは非常に重要な人だし、若泉さんは日本人として沖縄のことを一生懸命考えていた人で、命がけで文字どおり命をそのところで果たしたんだということで、人間として立派だという認識を持っているのは大田昌秀元知事です。大田昌秀元知事のところにこんな形の復帰になるんじゃないなかった、自分は死んでこれをおわびしないといけないという手紙が来たので、彼は大変なショックを受けて、そんなこと絶対やめてくれと返事をした。結局彼の死に関しては幾つかの説があるのだけれども、やはりそのところで命がけで沖縄のことを考えていた人であるし、捨て身の人であった。ああいう誠実な人の思いというものを軽々に扱ってはいけないということで、若泉さんの話になると大田さんは熱いんです。だから意外に革新の代表と思われるあの大田さんは、若泉さん大好きだし、尊敬している。

それに対して若泉さんに対して非常に厳しいのは、私が外交官として私が最も尊敬している1人なんだけれども、今年亡くなった吉野文六大使なんです。あの密約を結んだ当事者ですが、吉野さんは、若泉さんに関してはものすごくきつくて、あんな者を暗躍させるのがよくなかったのだ。あんな者なくたって密約はできたし。もっと踏み込んで聞くと、東郷さんのお父さんが悪いと言うんです。ああいう密約は東郷さんのお父さんが責任をもって政府の人間として結ぶべき密約だった。民間人で無責任な、何の責任の取り様もない人に関与させるべきじゃなかった。しかし、後から手記なんか書いて秘密を暴露した。そんなやつに任せたこと自体が間違いであって、外務省の事なかれ主義でどうも東郷文彦さんの性格がその辺であらわれたんだということで、吉野さんはすごいシビアなんです。このところは字で起こすと私と東郷さんの友情にひびが入ると思って、私の『吉野文六伝』には入れなかったんですけれどもね。

じゃ私自身はどうかというと、このところは大田先生、吉野文六さん、私が両方ともとても尊敬する中でも、私の心情は大田さんに近い。若泉さんは、やっぱり一生懸命やった人です。それは島田穀元沖縄県知事の顕彰についてもいろいろ言う人います。島田穀知事というのは元特高警察じゃないか。確かにそうです。でも、沖縄住民のためにあの状況で一生懸命やってくれた。泉前知事は本土に帰っちゃった。あれと比べたら全然違う。それからあと大田中将にしても、いろんな日本人たちが一生懸命やった。でもそれは私の母親を拾ってくれた前川という石部隊の大尉が戦争が始まる前に腸チフスで死んじゃうんだ。死ぬ前に母親だけ呼んで言った。俺が死ぬから、この戦争負けるよ。しかし、これぐらいで、こんな戦争で負けたぐらいで日本は滅びないからな。アメリカは絶対に女子どもは殺さないから捕虜になれ。そして時間をかけていい男を見つけて子どもをつくれ。それであとは頼むぞ、俺は死ぬけど。こういうふうに言った日本人がいて、母親の上に被さって弾から防いでくれた

日本兵がいて、それからあと捕虜になれよ、絶対殺されないから。それで自分は突っ込んでいった、その切り込み隊の人がいたし、また国際法のことに通暁している東京外事専門学校出身の通訳兵も捕虜になれと言ってくれたし、そういうような経験というのを母親がして、それが口伝で私に伝えられているから、若泉さんに対しても沖縄の一部の人たちは非常に厳しいけれども、私は厳しい感じにならない。だから、沖縄系の人の中でも、人によってこの問題は相当受けとめが違うと思います。それはその人の個人史を離れてはあり得ないと思います。

司会 ありがとうございます。大変丁寧なコメントに感謝申し上げます。

それでは、閉演の時刻が迫ってきています。本来であればお一人お一人最後にコメントをいただきたいと思うところなんですけれども、ちょっと時間の関係で全員ということは難しいかなと思いますので、引き続き恐縮なんですけれども、全体の総括として佐藤先生から一言、そして東郷所長から一言という形で締めくくればと思います。3分、3分ぐらいの見当であればと思いますが、いかがでしょうか。

佐藤 沖縄関係のシンポジウムというのはいろいろやられて、いろんな議論をやるんだけれども、これほど予測不能なシンポジウムは珍しかったと思います。というのは、沖縄関係のいろんなシンポジウムというのはポジショントークになってしまう。この人はこういうポジションでこういうことを言うだろう。そうすると、意外と私に関しては安全保障政策上で大変なタカ派なんだという地金の部分を知って驚いた人もいます。また、民族問題としては沖縄ではすごく事態が進捗しているという私の見方に驚いた人もいます。こういう場で話せるギリギリのところまで本音で話していくということがアカデミズムの場で議論するときの要諦だと思います。そしてまたそれが若泉先生の問題意識である。だからこれは京都産業大学でしかできなかった行事だと思う。ほかの大学ではなかなか逆にできない。ポジショントークにならないというそこを担保できたというところがきょうの最大の効果だと思います。

それで、それはこの場にいられている皆さんと一緒に議論を形成していくことができたので、主催者の皆さんとともに来ていただいた皆さんに深く感謝します。どうも本当にありがとうございます。

(拍手)

## 閉会の挨拶

世界問題研究所長 東 郷 和 彦

東郷 最後に一言申し上げさせていただきます。

総括の発言に入る前に、父、東郷文彦の名誉のために一言。吉野文六さんが言われたことについて佐藤さんと話したことはないんですけれども、あのときの状況は、密約をつくる別働隊がいたということを東郷文彦は知っていたと思います。けれども、これは7月のシンポジウムで申し上げたように、知っていた範囲は共同声明第8項の交渉に関して。それ以外の裏の密約があったということは、私はこれは本当に知らなかったと思います。若泉敬を使った責任者は佐藤総理です。佐藤総理の周りにそれを知っていた人が何人いるか、最終的には僕にはわかりません。しかし、外務省の首脳部が知っていたということは私はあり得ないと思うし、吉野文六さんも知らなかったと思うんですね。吉野文六さんがあれば東郷がやるべきだったというのは、本当に私もそう思う。しかも、東郷はその準備をしていたわけです。それはこの前のシンポジウムでも、要するにあの密約を外交官で受けられるような案をポケットに入れて、大臣に渡して満を持していたんですけれども、密約の交渉が動いてしまったので、ついにその紙を使う機会が出なかったということです。

いまだに外務省の一部にあの密約に関する怒りというのがあるのは私も聞いています。ほかの方で言っているのも聞いています。けれど、それを今から言うことは私は益はないと思っているんです。それはあの密約があつてまとまったということによってその後の沖縄というのが生まれ、今の沖縄があるわけなので、私は冒頭でも言いましたように、若泉先生がああ密約にかけた熱意というか、これは本当にすごい、素晴らしいと本当に思っているし、その後の彼の身の処し方も大変なものがあったなということで今朝の発言を申し上げた次第です。

最後に私の挨拶ですけれども、きょう最初のプレゼンからこの瞬間まで、今朝申し上げたように、もしこのシンポジウムを若泉敬と東郷文彦が聞いていたらどう思ったろうかなと、今の沖縄と日本との関係についてどう思ったろうかなと今朝からずっと考えてきました。シンポジウムを準備するに際して、私はこの問題にあらかじめ答えをつくってシンポに参加することはやめよう。本当にシンポの話聞いて、答えを私なりにその場で申し上げようと思っていました。今の私の印象としては、東郷文彦も若泉敬も「こういう議論をしてよかったな」と思って聞いてくれているのではないかなと思います。

それはなぜかという、きょうの佐藤先生の議論の持っていく方によって1つ共通点が出たと思うのです。それは今、沖縄で起きているということについて私たちの立場から言うと、等身大で、本当



に沖縄の立場に立って、それを理解していくということがいかに重要かということですね。その視点で幾つも具体的な点がありました。例えば大国は小国の動きを理解するのは難しいとか、アイデンティティというものが形成過程にあるとか。その全体を通じて、やはりわかり合うために踏み込んで一緒に考えていこうという姿勢に関しては、この5人を含めてここにおられる方みんなが賛成したと思うので、この点に関して若泉敬も東郷文彦も間違いなくそれは本当に必要だし、いいことだなと思うと思いました。

他方、今の国際情勢の中で一体沖縄がどうあるべきなのか。これについては若泉敬も国際政治の学者として、東郷文彦はもちろん言うまでもなく外交官として、日本という国の外交をずっとやってきた人たちですから、これについて一体沖縄がどういう役割を果たすかということについて何を考えるかということはちょっとよくわからない部分があります。ありますけれども、きょうの全体の議論を聞いていて、大体みんなが共通に浮かび上がってきた全体像というのは、1つは、沖縄という0.6%しかないところに75%の米軍の基地が集中している、この事実はおかしい。そのおかしさを改めるには、やはり本土における基地をもっとふやして、沖縄の負担を減らさなくてはいけない。この点については明示的に議論されていなくても、圧倒的に私たちのコンセンサスだったと思うし、彼ら2人も必ずそういうふうに言うだろうと思うんですね。

更に喫緊の問題として辺野古の問題が出てきてしまっていて、これに対してどうするか、どうしたらいいかということは、先ほどのご質問にもありましたし、私もここに入ってくるときに大体この辺まではコンセンサスになるかもしれないけれども、しかし、辺野古の問題をどう考えるのだということについては本当に答えがない状況で入ってきたのです。しかし、最後のディスカッションで、特に最後の佐藤さんの言われたことの中で、辺野古という問題が形成されてきた一種の特殊な事情、その事情というものに理解を馳せることができました。そして今の東京の政治の態度について述べられ、佐藤さんはそれとは違った態度として野中先生、梶山先生、橋本先生の時代の沖縄に対する彼らの態度を区別して発言されました。この3人の政治家の方は私も外務省にいたところに、特に野中先生、橋本先生には非常にお世話になった。どういう信条で政治をされるかということについてきょうの佐藤先生の話は非常に示唆的で、やっぱり今の東京のエリートがそういう点を踏まえてさらにこの問題をやっていけば、そこにかすかな希望があるかなと考えさせられました。今の時点での例えば翁長知事の態度、自決権はあるけれどもそれは使わないというところに今の沖縄が収斂しているのだということも非常に希望を残す点だと思いました。具体的にこれからどうなるかわかりませんが、このシンポジウムでそういうところまで議論したことはとてもよかったと思うし、多分私の意見では、ふんふんと若泉敬も東郷文彦も聞いているのではないかなと思いました。

どうも皆さん、ありがとうございました。(拍手)

司会 もう時間が過ぎております。最後までお聞きいただきまして、本当にありがとうございます。



どこにもポジショントークがない、あらかじめの予定調和を決めることはなく真摯に議論をするということでやってまいりました。これからもこの国とこの国の特に若者のために知恵を出して、汗をかく研究所として歩んでまいりたいと思っております。

改めまして、きょうの基調講演者、佐藤先生、そしてきょうご登壇いただきました全ての先生方に対して温かい拍手をお願いいたします。(拍手)

それでは、きょうのシンポジウムを一緒につくっていただきまして、本当にありがとうございました。最後にもう一つの共同作業をお願いしたいと思います。アンケートが中に入っております。できればそのアンケートにご記入いただいて、学生スタッフ等がそれを集めるために待っておりますので、そこにご投函ください。どうぞご協力よろしくをお願いいたします。

それでは、どうぞ足元にお気をつけてお帰りください。ありがとうございました。